長崎県文化財調査報告書　第196集

長崎県埋蔵文化財調査年報15

〔平成18年度調査分〕

２００８

長崎県教育委員会

はじめに

長崎県には，多くの文化財が知られていますが，文化財の中でも埋蔵文化財は約3,800箇所が確認されています。埋蔵文化財は，他の文化財とは違い，地下に埋蔵されているため，通常は人の目に触れることもなく，保護されています。しかしながら，開発行為によって消滅していく危険性もあります。遺跡内の開発行為については，協議のうえ開発計画の変更をお願いしたり，発掘調査というかたちで対処しているところです。

埋蔵文化財は他の文化財同様，先人の歴史を映すものであり，現在に生きる私達はこれらの文化財を大切に守り，将来に伝えていかねばなりません。その主旨の基，今回，平成18年度に長崎県が調査した遺跡についてその概要を掲載いたしました。

本報告により，県内の埋蔵文化財の調査の状況を知って頂くと共に，埋蔵文化財の保護と愛護の精神につながれば幸いです。

平成20年3月31日

長崎県教育委員会教育長　横田　修一郎

例　　言

1　本書は、長崎県における埋蔵文化財保護行政の現状と長崎県教育委員会が平成18年4月1日から平成19年3月31日までに実施した12ヵ所の発掘調査の概要を収録したものである。
2　各遺跡の調査概要中の位置図は、国土地理員発行の地図を使用し、[　] 内は図幅名（地区名）を表わしている。
3　本書に掲載した遺跡には、県教育委員会が主体となって発掘調査したもの、市町村事業に伴い調査対応したもの、市町村教育委員会による発掘調査を支援したものを含む。
4　平成7年度分より、壱岐・原の辻遺跡調査事務所関係の発掘調査については、調査事務所の調査年報（ニュースレター）に概要を収録することにしているため、ここでは特に扱っていない。
5　各遺跡の調査担当者と調査概要の文責については、文末に記している。
6　本書の編集については、長崎県教育庁学芸文化課が行った。

本文目次

はじめに

Ⅰ　長崎県の埋蔵文化財の動向

一　埋蔵文化財保護行政の現状 …… 1
二　県事業について …… 2
三　県内の報告書一覧 …… 9
四　長崎県教育委員会発行調査報告書一覧 …… 10
五　事業別発掘調査届出件数及び県市町別埋蔵文化財職員数の推移 …… 16

Ⅱ　各遺跡の調査概要

平成18年度長崎県内発掘調査箇所 …… 17

①稗田原遺跡 …… 18
②下宮遺跡 …… 20
③開遺跡 …… 22
④小野条里遺跡 …… 26
⑤黒丸遺跡 …… 30
⑥九州文化学園構内遺跡 …… 32
⑦門前遺跡 …… 34
⑧武辺C遺跡 …… 37
⑨竹辺D遺跡 …… 40
⑨竹辺D遺跡（試掘） …… 42
⑩武辺城跡 …… 43
⑪末永遺跡 …… 45

埋蔵文化財の保護について

埋蔵文化財とは，「土地に埋蔵されている文化財」と文化財保護法で定義されています。その特徴として，土地に埋蔵されているためその存在が一般的に知られていないということが挙げられます。

ただし，埋蔵文化財は，わが国あるいはそれぞれの地域の歴史や文化の成り立ちを理解する上で欠くことの出来ないものであり，国民共有の財産と言えるでしょう。現在の文化・生活は，私達の祖先が営々と築いてきた文化遺産を基盤に成立していることを考えるとき，埋蔵文化財を保護することがいかに重要であるかを感じ取ってもらえればと思います。

Ⅰ　長崎県の埋蔵文化財の動向

一　埋蔵文化財保護行政の現状

1　埋蔵文化財保護行政をめぐる情勢

文化財保護のための地方財政は依然，厳しい状況にあり，文化財を取巻く状況にも少なからず影響を及ぼしているのが現状です。市町でも補助金の減額などに対して，財政との折衝に苦労しているとのことであり，市町村合併にともなう事業量増，実質的な人員減なども少なからず大きな痛手となっています。今年度は，いわゆる団塊世代の定年を控え，埋蔵文化財保護行政も画期にきていると言わざるを得ないなど，文化財を取り巻く現状を踏まえ，新しい施策を考えていかなければならない状況にあります。

2　市町村合併

市町村合併に伴い，対象となる文化財総数はかなりの増となっていますが，専門職員の人員増については各自治体ともかなり厳しい状況にあるのが実状です。この現状に対し，民間調査組織の活用や，退職者の再任用などが期待されています。ただし，民間活用については，九州規準（九州地区で埋蔵文化財の調査や，出土品の取り扱いなどについて協議を行い，基準づくりを進めています。）などを参考に，ある一定の規準を基に事業を進める必要があります。あくまでも調査主体は教育委員会にあり，民間調査組織に一任するような調査体制には問題があると考えます。今年度の退職者については，県では3名がその対象となり，ここ数年で市町でも埋蔵文化財専門職の退職者が出てくるのは確実です。ある一定の規模の自治体は，少なくとも事業自体は減少することはないため，各市町での人員確保と，確保が出来ない場合の体制をどのように整備するかが，大きな課題となってくるでしょう。また，人員の減などに対しては，地域とのさらなる連携を図り，ボランティアの育成などによる協力体制も必要となるものと思われます。各地域のボランティア活動は，地域の皆様の協力あってのものであり，現在の文化財を取り巻く状況を考慮し，文化財保護のためのボランティアにご協力願えれば幸いです。

3　埋蔵文化財保護行政の体制

県では，県教育委員会に学芸文化課，壱岐に原の辻遺跡調査事務所，佐世保市に佐世保文化財調査事務所があり，それぞれの地域で文化財の調査を実施しています。各市町にも文化財を担当する職員は配置されており，それぞれの地域の文化財の保護・活用を進めています。

本県の平成18年度における専門職員は市町併せて96名で，平成17年と大きな変化はなく，職員のうち27名が嘱託職員です。このうち県の職員は40名で，そのうち嘱託職員17名，教育現場からの出向が13名です。県の職員ではかなりの嘱託職員の数が見られますが，多くは西九州道建設などの大型事業に伴う採用です。どの地域も人員削減に苦労していますが，それぞれに工夫しながら体制を整えているのが現状です。

二　県事業について

1　開発に伴う埋蔵文化財の取り扱いついて

県学芸文化課では，4月に開発部局との調整会議を行い，埋蔵文化財の取扱いについて協議を行っています。開発行為については，埋蔵文化財保護の観点から，周知の埋蔵文化財包蔵地内や，隣接する地域について予備調査を行い，予備調査の結果，開発行為が遺跡に及ぼす影響が大きい場合，保存のための協議を行っています。ただし，開発の計画変更ができない場合は，発掘調査を行うこととなりますが，無届工事などを防ぐためにも，開発事業部との連携は，欠かせないものです。市町においても独自に開発部局との調整を行い，開発行為に備え埋蔵文化財がき損することがないよう十分留意する必要があります。

平成18年度に県学芸文化課が実施した試掘・範囲確認調査及び本調査は，次のとおりです。

【試掘・範囲確認調査】

遺跡名		所在地	調査原因
1	黒丸遺跡	大村市	大村地区職員公舎新築工事
2	竹辺D遺跡	佐世保市	学校建設に伴う範囲確認調査

【本 調 査】

	遺 跡 名	所 在 地	調 査 原 因
1	稗 田 原 遺 跡	島 原 市	一般県道野田島原線道路改良工事
2	下 宮 遺 跡	島 原 市	一般県道野田島原線道路改良工事
3	小 野 条 里 遺 跡	諫 早 市	一般国道 57 号森山拡幅工事
4	開 遺 跡	諫 早 市	諫早飯盛線交通安全施設等整備工事
5	竹 辺 C 遺 跡	佐 世 保 市	一般国道 497 号佐々佐世保道路建設工事
6	竹 辺 D 遺 跡	佐 世 保 市	一般国道 497 号佐々佐世保道路建設工事
7	九州文化学園構内遺跡	佐 世 保 市	一般国道 497 号佐々佐世保道路建設工事
8	武 部 城 跡	佐 世 保 市	一般国道 497 号佐々佐世保道路建設工事
9	門 前 遺 跡	佐 世 保 市	一般国道 497 号佐々佐世保道路建設工事
10	末 永 遺 跡	佐 世 保 市	一般国道 497 号佐々佐世保道路建設工事

2 明日へつなぐ埋蔵文化財人づくり事業

【開発部局・文化財保護部局担当者埋蔵文化財基礎講座】

期 日 平成 18 年 6 月 13 日（火）～14 日（水）

場 所 13 日：長崎県ＪＡ会館 7 階 701 ～ 704 会議室　　14 日：出島交流会館 2 階研修室

対象者 ①県・市町の開発事業計画及び実施担当者

②県・市町の開発に係る認可，補助等の担当者

③市町教育委員会文化財担当者

内 容 第 1 日目（参加数：116 名）

①史跡管理の現状と課題について

②開発事業と埋蔵文化財保護行政について

③埋蔵文化財発掘調査と事務手続きの流れ

④埋蔵文化財保護行政の現状と展望　（文化庁記念物課文化財調査官　清野孝之）

第 2 日目（参加数 47 名）

①国庫及び県費補助等について

②「九州の城郭石垣の変遷について」（佐賀県立名護屋城博物館　高瀬哲朗）

本事業は，市町文化財担当者と開発部局担当者に埋蔵文化財に対する理解を深めてもらい，その取扱いについて具体的な情報を提供することにより，円滑な埋蔵文化財保護行政を推進することを目的として実施しています。また，併せて埋蔵文化財担当者に専門的な知識を習得する場を提供することにより，埋蔵文化財の保護と活用を図ることも併せて目的としています。

1 日目の研修では，本県内における国史跡の無許可現状変更という行為に鑑み，史跡管理について文化財担当者はもとより，開発部局にも理解して頂くために，最初の研修項目としました。また，埋蔵文化財に係る事務の流れを研修することにより，開発部局と文化財担当者が共通意識をもつことを

目的に，文化財担当者に開発部局を交えて基礎研修を行いました。

文化庁からは，清野調査官より「埋蔵文化財保護行政の現状と展望」と題し，講義して頂いた。

全国規模での埋蔵文化財を取り巻く状況と，今後埋蔵文化財に何が求められているのかについて話をされ，特に，埋蔵文化財の活用を積極的に実施することについて強調された内容でした。

2日目の研修では，埋蔵文化財に特化した研修を実施した。今回は「九州の城郭石垣の変遷についてと題して」名護屋城博物館の高瀬哲郎学芸課長の講義を設定しました。学芸文化課では，平成16年から中近世城館跡分布調査を実施し，市町にも協力を頂いているところです。今回の講義により，中近世城館に対する専門知識を持つとともに，城館跡を核とした展開を考えてもらえれば幸いです。

【長崎県市町文化財担当者会議】

期　日　平成18年9月12日（火）（参加数：31名）

場　所　出島交流会館2階研修室

対象者　市町教育委員会文化財担当者

内　容　①文化財保護・活用のためのグループワーク研修

②登録文化財制度について　（長崎大学工学部　岡林教授）

③文化庁による「埋蔵文化財の保存と活用」を巡る埋蔵文化財保護行政の現状と課題

（大村市教育委員会　文化振興課　稲富課長）

④現状変更の手続き等について

⑤出島復元整備第Ⅱ期事業について　（出島復元整備室　高田主事）

⑥出島和蘭商館跡視察

今回の研修の大きな特徴は，グループワークを新たに設定したことにある。初めての試みだったにも関わらず，出席者の評価も高かった。これまでの受け身の会議とは違い，参加型の形式だったため，新鮮みがあり活発に議論がなされていました。内容的には，学芸文化課からグループワークについての説明があり，進め方の説明，討議，発表という形式で実施しました。各班にはワークシートを配付し，各設問についてグループで意見を取りまとめ，各グループのワークシートを回収し，コピーして全員に配付後，グループごとに発表を行い，発表では問題点と改善策について発表を行うようにした。

今回初めての試みであり，時間設定などについて改善すべき点もありましたが，出席者の評価も高く，さらに工夫・改善しながら今後も続けていく必要があるものと感じました。今回の取り組みにより改めて感じたのは，普段，各市町の担当者どうしが議論するという場が少なく，新たな情報や，他の市町の考え方などを共有する場の必要性と，そのような場の設定を県が主導権をにぎり設定していくことの必要性を感じた研修でした。

3　重要遺跡情報保存活用事業

県内約3,800ヶ所を数える遺跡のデジタル情報を，遺跡情報システムとして構築し，県のホームページで閲覧出来るように整備している。ホームページの閲覧は，平成19年4月から開始出来るようにし，各種開発事業担当者が事業計画段階で，計画地域に埋蔵文化財がないかを容易に調べることができることや，県民全体に埋蔵文化財の周知化を図ることを目的とする。

（1）遺跡情報システム整備事業

遺跡台帳と発掘調査で検出された遺構・遺物や写真・図面等の情報と調査履歴等をデータベース化して，開発調整や歴史教材の資料として活用することを目的とした事業です。また，遺跡の内容や調査履歴等の資料提示を迅速化させ，開発側との速やかな協議・調整を図るために実施しています。平成18年度は，地図に遺跡範囲を掲載する作業をおこない，各市町にも遺跡範囲確認のためにご足労願いました。この事業は今年度で終了し，平成19年4月には，県のホームページで閲覧が可能な状態にします。遺跡地図の転載については，慎重におこなったが，範囲や場所などについて食い違っている場合があれば，学芸文化課に届出をおこなって貰えれば早急に対応する。また，新規発見の遺跡についても迅速な対応が求められるため，確実な資料の送付を願います。

県のホームページ上での検索については，長崎県のホームページ→くらしの情報→文化・文化施設→遺跡情報システムで検索できます。開発事業者はもちろんのこと，遺跡に興味がある方はご利用して見て下さい。

（2）長崎県中近世城館跡分布調査事業

本県には，資料等から確認される城館跡が約600ヶ所存在します。ただし，資料内容が不十分なため，その位置などが確認されていない城館跡が数多くあり，その確認を行うために悉皆調査（分布調査）を昨年に続いて実施しています。分布調査の目的としては，城館跡の範囲，性格，重要性などを把握し，開発事業との調整や，保存・活用のための資料整備を行うことを目的としています。事業は，平成17年から平成21年までの5ヵ年継続事業とし，平成17～18年度は，資料調査と悉皆調査（分布調査）を行い，平成19年度～20年度は遺構が良好に残存しているものについて，詳細調査（城跡の状況を図として作成する）を実施し，平成21年度に報告書を作成する予定です。城館跡は，地域のシンボルと成り得るもので，この事業をきっかけとして，城館跡を中心としたまちづくりなどを推進していただければと思います。

（3）開発事業関連予備調査

本事業は，分布調査（表面観察を行い，遺跡であるかどうかの判断を行う）・試掘調査（遺跡が隣接する事業対象地に遺跡が存在しているかどうかの有無を，判断する。）・範囲確認調査（周知の遺跡の範囲や内容について特定し，開発事業に求められる基礎資料を得るための調査）などの予備調査を行い，開発事業との円滑な調整を図ることを目的として，年間4遺跡程度を調査を実施する計画です。今年度は，2遺跡の調査に留まり，調査の結果開発事業に支障がないことが解りました。

この事業のでも理解できるように周知の埋蔵文化財包蔵地内での開発行為については，許可が必要で，平成18年度は，下記の遺跡の調査を実施した。

	遺跡名	所在地	調査原因
1	黒丸遺跡	大村市	職員住宅建設工事
2	竹辺城跡	佐々町	学校増築改修工事

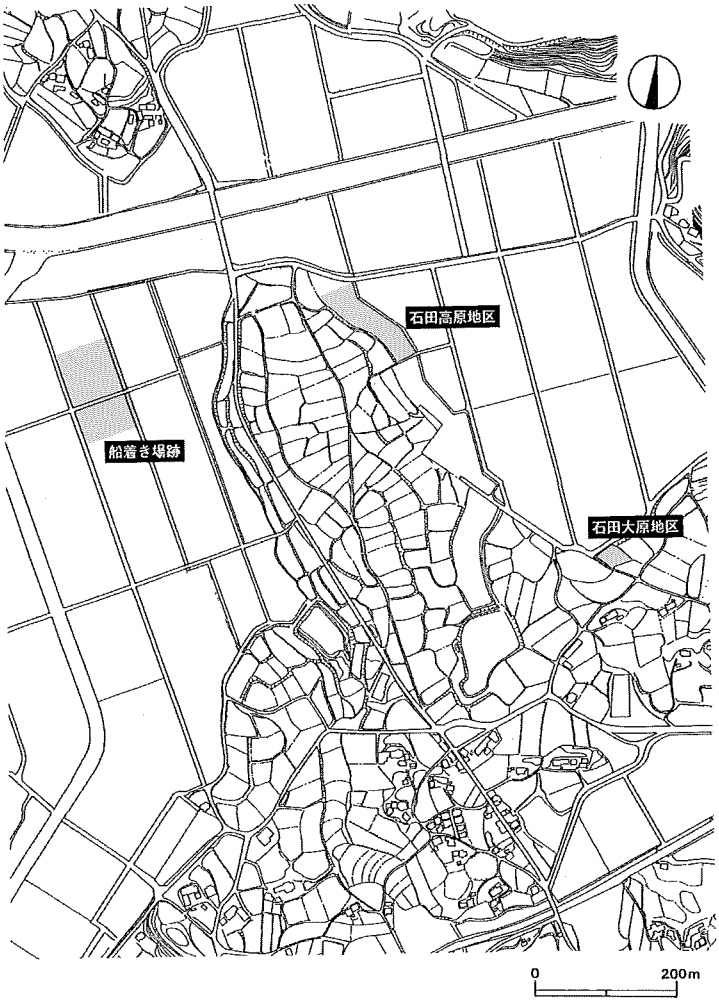
原の辻遺跡保存整備事業及び保存活用事業

中国の歴史書『魏志倭人伝』に記載された「一支國」の王都として，国内で唯一特定されている『国特別史跡　原の辻遺跡』では，今年度丘陵中央部の祭儀場跡に主祭殿，脇殿，迎賓館と推測されている大型竪穴住居等3棟が復原された。これまで何も無かった遺跡の丘陵部に往時の姿が甦りつつある。

（1）保存整備事業

調査研究事業

調査研究事業は，平成14年度から遺跡内の環濠や河川等の状況調査を目的として実施しているが，平成18年度は，石田高原地区・石田大原地区・船着き場跡の3地区の調査を行った。（第1図）



平成18年度調査研究事業調査区位置図

【石田高原地区の調査】

石田高原地区の調査区は，原の辻丘陵の東側周辺部にあたり，平成5年度の調査以来3回の調査が行われ，複数の濠があることが確認されていが，濠を中心とする遺構のつながりを確認することを目的として実施した。

調査の結果，弥生時代中期～古墳時代初頭の土器が出土した濠5条と土坑1基そして道路状遺構を検出した。濠はいずれも過去の調査で確認していた濠とつながったが，濠の中には全長が20数mに満たないものもあることも分かった。また，多くの濠の断面がU字形や逆台形で，かつては水が溜まっていたことを示す黒い腐植土が詰まっていたが，1本の濠は，断面がV字形で黒い腐植土は見られなかった。ここは常に水が湧く場所なので，このV字濠の中にも水が溜まっていたと思われるが，腐植土が無いことと詰まっていた土の状況から，この濠は溜まった土が頻繁に除かれていて，ある時期（出てきた土器から弥生時代後期と思われます）に一度に埋められた。もしくは，掘られた後短期間のうちに埋め戻されたと考えらた。これらのことから，この濠は他の濠と使われ方が異なっていたことが伺えた。

道路状遺構は，丘陵の縁辺に沿って人頭大まの礫や土器片を薄く敷き詰めて作られていた。幅は3mを測り，70mの長さを確認した。特徴として①突き固めたか踏み固めたかでもしたように平らになった部分があること。②礫どうしが密に重なりあっていること。③もともとは大きな土器の破片が移動

をせずにその場で小さく砕けていることが挙げられ，これらのことから道路として利用した遺構と判断した。また，礫の中から出土した遺物は，弥生時代の土器片が圧倒的に多いが，4～5世紀代の土師器片が出土したことから，作られた年代もそのころと考えられる。また，使われなくなった時期については，道路を埋めている土の時代から奈良時代（8世紀）と判断された。

過去の調査では，北へ200 mの地点から奈良時代の道路跡が見つかっている。この道路跡は，道幅5 mで両端に側溝を持っており，しっかりとした作りになっていて，できた時代や規模を考えると，この奈良時代の道路跡は，今回見つかった道路跡と入れ替わりに作られ使われた道路跡であることも十分考えられる。

【石田大原地区の調査】

石田大原地区は，過去の調査で墓域が確認された石田大原地区と大川地区との中間に位置し，平成15年度の石田町教育委員会による調査の際に，環壕の一部と思われる濠が確認されており，周辺から青銅鏡が出土している。今回は，壕の時期と伸びる方向を再度確認することを目的として調査を実施した。

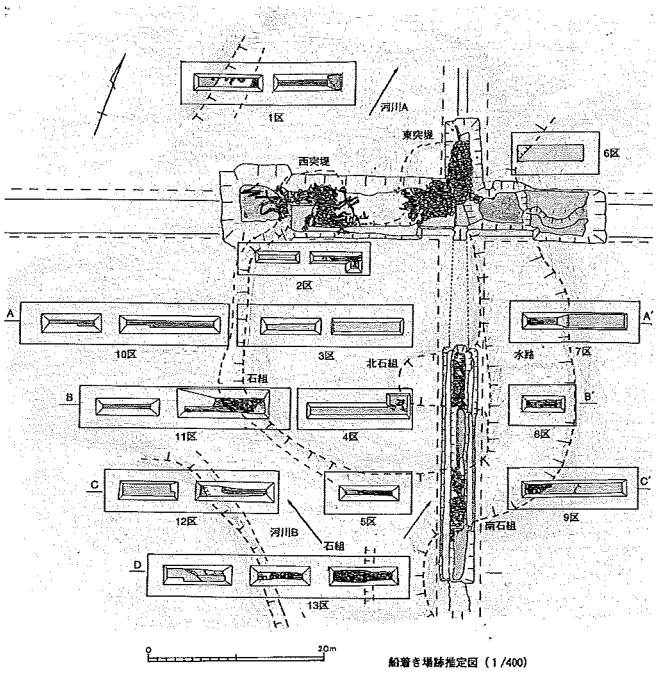
調査の結果，縄文時代のものと思われる土坑と，石田町の調査で検出した濠の続きを確認した。濠は，南北方向に作られるものの調査区南側で西側に急激に折れ曲がっていた。濠が利用された時期は，弥生時代の中期後葉（紀元前1世紀中頃）と判断された。

また，現代の整地層から青銅鏡片が出土したが，この鏡片は，前回の石田町の調査の際に出土した鏡（「内行花文鏡」）と同一の物であることが分かった。また，出土した状況から，調査区の南側にある大川地区の墓域から紛れ込んだと考える。

【船着き場跡の調査】

昨年度の調査では，船着き場が水路で囲まれた島状の地形であったことが推測でき，船着き場が作られた川の幅が約35 mであったことが確認できたが，今年度は，昨年の調査で確認できなかった，船着き場の西側の部分の状況を解明することを目的として調査を実施した。

調査の結果，船着き場の西側に位置する11区の東側調査区東端から石組を検出した。石組の端は石が崩れないように杭で押さえられており，杭自体も横木を据え樹皮や草束を巻いてしっかりと固定されていた。



船着き場跡推定図（1/400）

13区からは，河床に玄武岩の角礫を利用した石組がある川を確認した。川は12区から続くものであり，南東方向へ延びることが予想された。河床に作られた石組みは，約0.5 mの高さでほ

ぼ垂直に積み上げられていた。また，東側は一段下がり，上面をそろえるように礫が敷かれていた。

これらのことから，①船着き場の西側から南側の周縁部は，石によって覆われている可能性が高くなった。②船着き場は，北側を流れる幅約 35 mの河川（A）と，南側を流れる幅約 12 mの河川（B）により形成された地形を利用して造られたことが推測される。③船着き場跡は，南北が突堤から南石垣（石敷きの水路）までの長さ約 40 m，東西の幅は西側の石組から北石組までの約 30 mの規模をもつことが推測できる。④河床から見つかった石組みは，当時の河川の水位を考えると明らかに水没する高さであり，船着き場の東側にある水路に水を引き込むための河川の水利施設の一部である可能性が強い。以上のことが分かった。

（２）保存活用事業

①原の辻遺跡調査事務所及び壱岐・原の辻展示館の管理運営

②調査指導委員会の開催〔第１回平成 18 年 7 月 25 日（火），第２回平成 18 年 11 月 9 日（木）〕

③「要覧」「原の辻ニュースレター（第 25～27 号）」の発行

④出土遺物の複製・保存処理

⑤調査記録ビデオの作製

⑥三姉妹遺跡（原の辻遺跡・吉野ヶ里遺跡・平塚川添遺跡）連絡会議及び交流事業

⑦ホームページの管理運営

⑧原の辻ボランティアガイド養成講座 Dr. ハル「原の辻壱岐活き塾」

第１回… 6 月 17 日（土）茶谷　幸治（「長崎さるく博」コーディネイトプロデューサー）「市民参加の観光ボランティアについて～長崎さるく博の事例から～」

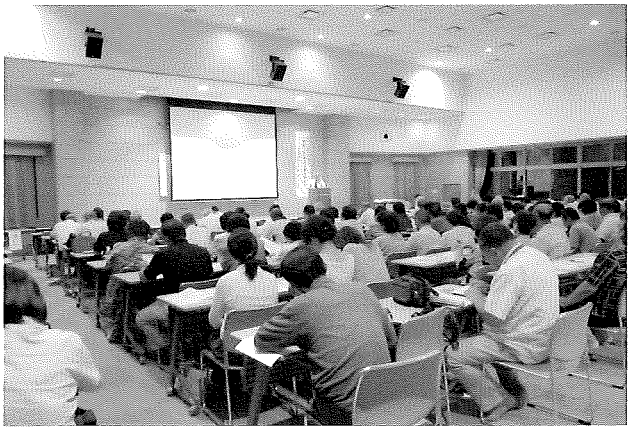
第２回… 7 月 22 日（土）所員「火起こし・勾玉づくり」

第３回… 8 月 21 日（月）塩屋　勝利（一支國研究会会長）「原の辻遺跡事始め」

第４回… 9 月 16 日（土）「遺跡見学・発掘体験」台風接近の為中止

第５回…10月 14 日（土）佐古　和枝（関西外国語大学教授）「遺跡ボランティアの活用」

第６回…12月 16 日（土）山西　實（一支國研究会副会長）「わら縄づくり，わら葺竪穴住居つくり実習」



【Dr ハル「原の辻壱岐活き塾」第３回（原の辻遺跡事始め）講師：塩谷勝利】

【Dr ハル「原の辻壱岐活き塾」第６回 わら縄 わら葺き竪穴住居づくり】

三　県内の報告書一覧

No.	報　告　書　名	発 行 機 関
1	万才町遺跡２　～県庁新別館増築工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書～ （長崎県文化財調査報告書第192集）	長崎県教育委員会
2	開遺跡２　～主要地方道諫早飯盛線道路改良工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書～　（長崎県文化財調査報告書第193集）	長崎県教育委員会
3	稗田原遺跡６・下宮遺跡　～一般県道野田島原線道路改良工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書～　（長崎県文化財調査報告書第194集）	長崎県教育委員会
4	原の辻遺跡　～石田大原墓域緊急調査報告書～ （原の辻遺跡調査事務所調査報告書第35集）	長崎県教育委員会
5	原の辻遺跡　～原の辻遺跡調査研究事業調査報告書～ （原の辻遺跡調査事務所調査報告書第36集）	長崎県教育委員会
6	福井洞窟範囲確認調査報告書　付録　直谷岩陰試掘調査報告 （平成18年度佐世保市埋蔵文化財発掘調査報告書）	佐世保市教育委員会
7	諫早市文化財調査年報１（平成9年度～平成17年度） （諫早市文化財調査報告書第20集）	諫早市教育委員会
8	市内遺跡発掘調査概報 （大村市文化財調査報告書第30集）	大村市教育委員会
9	松浦市内遺跡確認調査(1)　～鷹島町内遺跡確認調査報告書～ （松浦市文化財調査報告書第１集）	松浦市教育委員会
10	権現脇遺跡　～赤松谷川1号床固工工事に伴う発掘調査 （南島原市文化財調査報告書第１集）	南島原市教育委員会
11	龍王遺跡Ⅱ・真正寺条里跡　～旧石器時代編～ （雲仙市文化財調査報告書第２集）	雲仙市教育委員会

四　長崎県教育委員会発行調査報告書一覧

集	報　告　書　名	発行年
1	長崎県遺跡地名票（埋蔵文化財包蔵地）	1962
2	五島遺跡調査報告	1964
3	民俗資料調査報告書	
4	福井洞穴調査報告書	1966
5	深堀遺跡	
6	男女群島特別調査報告	1968
7	宮下遺跡調査報告（図録編）	1968
8	対馬－豊玉村佐保シゲノダン・唐崎の青銅器を出土した移籍の調査報告	1969
9	宮下遺跡調査報告（解説編）	
10	堂崎遺跡調査報告書（長崎県長与町所在）	1970
11	有明海の沿岸地区の民俗	1972
12	長崎県の民家（前編・後編）	1972
13	対馬西岸阿連・志多留の民俗	1972
14	里田原遺跡（図録）	
15	下五島貝津・大串の民俗（本文編・図録編）	1974
16	対馬の文化財	
17	対馬－浅茅湾とその周辺の考古学調査－	1974
18	里田原遺跡（略方Ⅱ）	1974
19	壱岐の文化財	
20	対馬の遺跡	1975
21	里田原遺跡	1975
22	下五島の文化財	
23	長崎県民俗地図	1976
24	諫早北バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第１集（図録編）	1975
25	里田原遺跡	1976
26	原の辻遺跡	1976
27	西彼杵半島猪垣分布調査概観	1977
28	平戸市野子地域の民俗・福島町土谷の民俗（上・下）	1977
29	長崎県のカトリック教会	1977
30	旧島原藩薬園跡環境整備報告	1977
31	原の辻遺跡Ⅱ－長崎県壱岐郡所在の弥生遺跡－	1977
32	里田原遺跡	1977
33	金石城跡緊急発掘調査報告書	1977
34	長崎県の民俗芸能・民謡（Ⅰ）採譜篇・別冊	
35	長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅰ	1978

集	報　告　書　名	発行年
36	世知原町開作免の民俗	1978
37	原の辻遺跡Ⅲ－長崎県壱岐郡所在の弥生遺跡－	1978
38	里田原遺跡	1978
39	日蘭関係資料	1979
40	平戸・上五島地区の文化財	1979
40-2	平戸・上五島地区の文化財（美術工芸品の部）	1979
41	長崎県の民俗芸能・民謡（Ⅱ）採譜篇	1979
42	長崎県の海女（海士）	1979
43	長崎県の民俗芸能・民謡（Ⅲ）	1979
44	松浦市とその周辺地区の文化財	1979
45	長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅱ	1979
46	大村湾の漁労習俗	1980
47	長崎県の民俗芸能・民謡（Ⅳ）	1980
48	キリシタン関係資料	1980
49	佐世保市とその周辺地区の文化財	1980
50	長崎県埋蔵文化財集報Ⅲ	1980
51	串島遺跡	1980
52	ケイマンゴー遺跡	1980
52-a	長崎県の民俗芸能・民謡（Ⅴ）	1981
53	諫早・大村・北高来郡の文化財	1981
54	九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅰ	1981
55	長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅳ	1981
56	九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅱ	1982
57	長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅴ	1982
58	堂崎遺跡－長崎県有家町所在の海中干潟遺跡－	1982
59	島原・南高の文化財	1982
60	針尾人崎遺跡－佐世保市針尾中町所在－	1982
61	長崎唐寺関係所蔵品目録	1982
62	長崎・西彼の文化財	1983
63	橘湾の漁労習俗	1983
64	九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅲ	1984
65	諫早中核工業団地造成に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅰ	1983
66	長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅵ	1983
67	長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅶ	1984
68	今福遺跡Ⅰ　県道矢次・南有馬線改良工事に伴う埋蔵文化財調査報告書　第一冊	1984
69	九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅳ	1984
70	長崎県の農具調査（前編）	1985

集	報　告　書　名	発行年
71	名切遺跡	1985
72	九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅴ	1985
73	西ノ角遺跡	1985
74	諫早中核工業団地造成に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅱ	1985
75	長崎県埋蔵文化財集報Ⅷ	1985
76	楼楷田遺跡　松浦火力発電所建設に伴う埋蔵文化財調査報告書	1985
77	今福遺跡Ⅱ　県道矢次・南有馬線改良工事に伴う埋蔵文化財調査報告書　第二冊	1985
78	百花台遺跡	1985
79	長崎の近世社寺建設緊急調査報告書	1986
80	長崎県の農具調査（後編）	1986
81	上原遺跡	1986
82	長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅸ	1986
83	殿崎遺跡	1986
84	今福遺跡Ⅲ　県道矢次・南有馬線改良工事に伴う埋蔵文化財調査報告書　第三冊	1986
85	諫早中核工業団地造成工事に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告Ⅲ	1986
86	長崎県埋蔵文化財調査集報Ⅹ	1986
87	長崎県遺跡地図	1987
88	長崎県の民謡	1987
89	温泉岳　保存管理計画策定書	1988
90	中道壇遺跡	1988
91	長崎県埋蔵文化財調査報告書ⅩⅠ	1988
92	百花台広域公園建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書	1988
93	九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅵ	1989
94	長崎県埋蔵文化財調査集報ⅩⅡ	1989
95	魚洗川Ｂ遺跡－全国植樹祭会場造成工事に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書－	1990
96	長崎県の諸職調査	1990
97	長崎県埋蔵文化財調査集報ⅩⅢ	1990
98	九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅶ	1990
99	九州横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅷ	1991
100	礫石原遺跡－県道愛野～島原線改良工事に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書－	1991
101	長崎県埋蔵文化財調査報告書ⅩⅣ	1991
102	対馬天然記念物緊急調査報告書	1991
103	長崎県天然記念物実態調査報告書－対馬を除く－	1991
104	長崎県埋蔵文化財調査集報ⅩⅤ	1992
105	上大垣遺跡	1992
106	県内古墳詳細分布調査報告書	1992
107	大陸渡来文物緊急調査報告	1992

集	報　告　書　名	発行年
108	長崎県埋蔵文化財調査集報ⅩⅥ	1993
109	県内重要遺跡範囲確認調査報告書	1993
110	長崎県遺跡地図－長崎市・諫早市・大村市・西彼杵郡・北高来郡－	1994
111	長崎県遺跡地図－島原市・南高来郡地区－	1994
112	長崎県遺跡地図－壱岐地区－	1994
113	長崎県埋蔵文化財調査年報Ⅰ	1994
114	県内重要遺跡範囲確認調査報告書Ⅱ	1994
115	中木場遺跡－水無川第３遊砂地造成工事に伴う発掘調査報告書－	1994
116	県道国見雲仙線改良工事に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書	1994
117	長崎県遺跡地図－福江市・南松浦郡地区－	1995
118	長崎県遺跡地図－対馬地区－	1995
119	長崎県遺跡地図－佐世保時・平戸市・松浦市・北松浦郡・東彼杵郡地区－	1995
120	長崎県の民俗芸能－長崎県民俗芸能緊急調査報告書－	1995
121	県内重要遺跡範囲確認調査報告書Ⅲ	1995
122	長崎県埋蔵文化財調査年報Ⅱ	1995
123	万才町遺跡　長崎県庁新別館建替えに伴う発掘調査報告書	1995
124	原の辻遺跡	1995
125	長崎県埋蔵文化財調査年報Ⅲ	1996
126	伊木力遺跡Ⅰ	1996
127	黒丸遺跡Ⅰ－都市計画道路杭出津・松原線改良工事に伴う発掘調査報告書－	1996
128	中木場遺跡Ⅱ－水無川４号遊砂地造成工事に伴う工事立会調査－	1996
129	中木場遺跡Ⅲ－水無川１号ダム建設工事に伴う緊急発掘調査－	1996
130	県内重要遺跡範囲確認調査報告書Ⅳ	1996
131	長崎奉行所関係文書調査報告書	1997
132	黒丸遺跡Ⅱ	1997
133	県内重要遺跡範囲確認調査報告書Ⅴ	1997
134	伊木力遺跡Ⅱ	1997
135	長崎県埋蔵文化財調査年報Ⅳ	1997
136	稗田原遺跡Ⅰ	1997
137	広平遺跡	1997
138	桟原城跡	1997
139	石田城跡	1997
140	長崎県の近代化遺産－長崎県近代化遺産総合調査報告書－	1998
141	大浜遺跡	1998
142	蒲河遺跡	1998
143	沖城跡	1998
144	桜町遺跡	1998

集	報　告　書　名	発行年
145	稗田原遺跡Ⅱ	1998
146	長崎奉行所（立山役所）跡	1998
147	県内主要遺跡内容確認調査報告書Ⅰ	1998
148	長崎県埋蔵文化財調査年報５	1998
149	馬乗石遺跡	1998
150	長崎県埋蔵文化財調査年報６	1999
151	県内主要遺跡内容確認調査報告書Ⅱ	1999
152	稗田原遺跡Ⅲ	1999
153	長崎県のカクレキリシタン－長崎県のカクレキリシタン習俗調査事業報告書－	1999
154	長崎街道－長崎県歴史の道（長崎街道）調査事業報告書－	2000
155	長崎県埋蔵文化財調査年報７	2000
156	県内主要遺跡内容確認調査報告書Ⅲ	2000
157	稗田原遺跡Ⅳ	2000
158	長崎県埋蔵文化財調査年報８	2001
159	県内主要遺跡内容確認調査報告書Ⅳ	2001
160	平野遺跡	2001
161	稗田原遺跡Ⅴ	2001
162	栄町遺跡	2001
163	石田城跡Ⅱ	2001
164	長崎県埋蔵文化財調査年報９	2002
165	県内主要遺跡内容確認調査報告書Ⅴ	2002
166	森岳城跡	2002
167	玖島城跡	2002
168	千里ケ浜遺跡	2002
169	歴史の道整備活用推進事業　長崎街道整備活用計画報告書	2002
170	長崎県の祭り・行事調査報告書	2002
171	長崎県埋蔵文化財調査年報10	2003
172	県内主要遺跡内容確認調査報告書Ⅵ	2003
173	森岳城跡Ⅱ	2003
174	供養川遺跡	2003
175	長崎県埋蔵文化財調査年報11	2004
176	地域拠点遺跡内容確認発掘調査報告書Ⅰ	2004
177	長崎奉行所（立山役所）跡－歴史文化博物館（仮称）建設に伴う発掘調査報告書－	2004
178	今屋敷家老屋敷跡	2004
179	下木場遺跡	2004
180	日蘭関係資料Ⅱ～県外編～	2004
181	長崎県の近代和風建築－長崎県近代和風建築総合調査報告書－	2004

集	報　告　書　名	発行年
182	長崎県埋蔵文化財調査年報12	2005
183	長崎県奉行所（立山役所）跡　岩原目付屋敷跡　炉粕町遺跡 －歴史文化博物館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（下）－	2005
184	出島－一般国道499号線電線共同溝整備工事に伴う緊急調査報告書－	2005
185	地域拠点遺跡内容確認発掘調査報告書Ⅱ	2005
186	小野Ｆ遺跡－一般国道497号佐々佐世保道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－	2005
187	長崎県埋蔵文化財調査年報13	2006
188	地域拠点遺跡内容確認発掘調査報告書Ⅲ	2006
189	肥賀太郎遺跡－県道愛野島原線上流付替工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－	2006
190	門前遺跡－一般国道佐々佐世保道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ－	2006
191	長崎県埋蔵文化財調査年報14	2007

五　事業別発掘調査届出件数及び県市町別埋蔵文化財担当職員数の推移

○事業別発掘調査届出（９９条関係）件数の推移

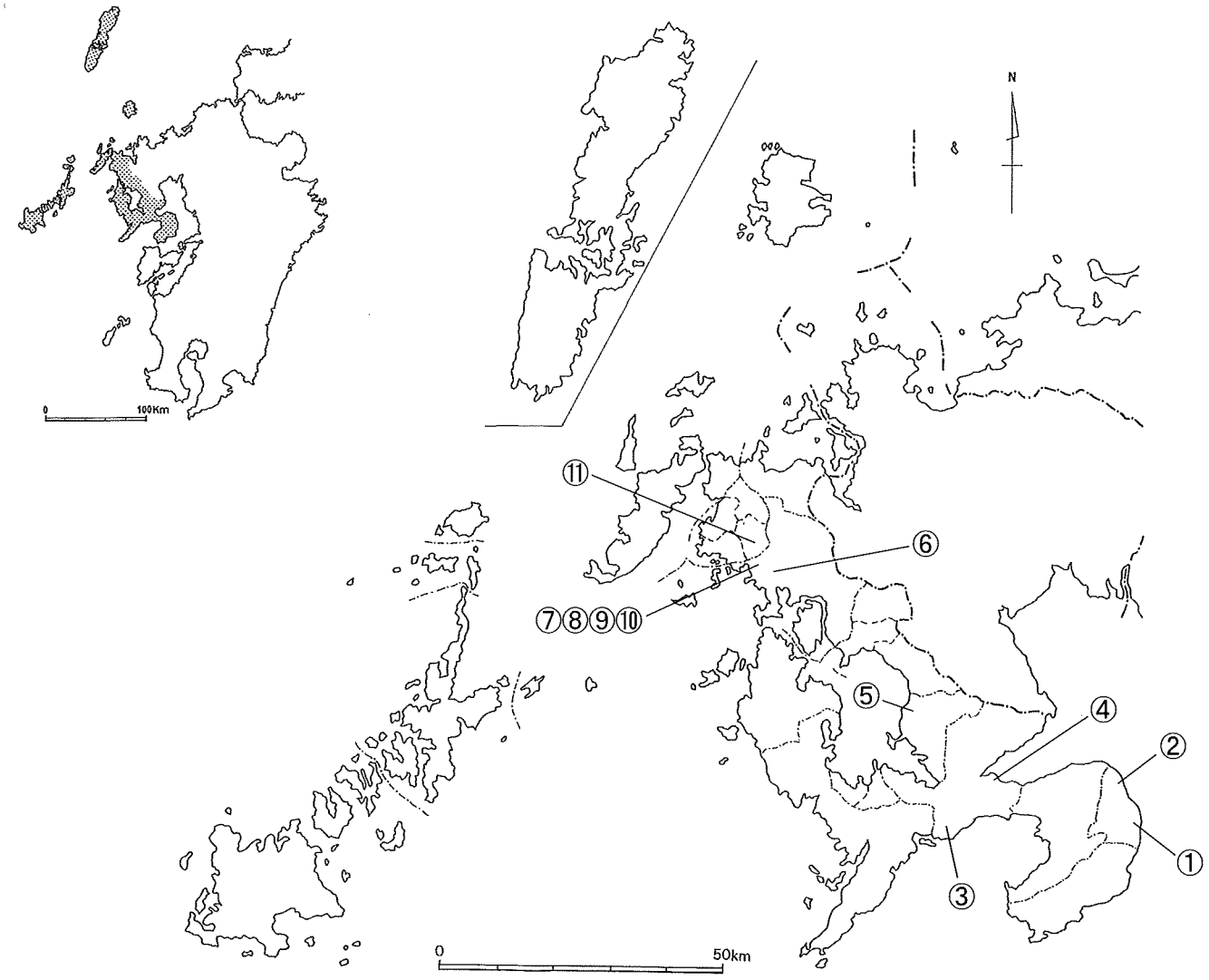
		平成13年	平成14年	平成15年	平成16年	平成17年	平成18年
緊急調査	道路	7	6	１０	１２	１３	１３
	河川	0	0	1	1	0	1
	学校	1	1	1	0	0	0
	住宅・宅地造成	3	3	5	4	4	3
	工場	0	0	0	0	0	2
	店舗等	0	0	0	1	1	0
	その他の建物	2	4	1	4	3	1
	土地地区画整理	0	0	0	0	0	2
	公園造成	0	1	1	0	0	1
	観光開発	0	0	0	0	0	0
	ガス等	3	2	2	2	0	0
	農業関係	9	4	6	9	6	6
	その他の開発	2	2	3	1	0	1
	自然崩壊	0	0	0	1	0	0
	遺跡地図作製等	0	0	0	0	0	0
	保存目的	１３	１４	１８	２４	１９	7
	遺跡整備	2	2	0	2	0	0
学術・研究		8	6	2	3	1	1
合計		５０	４５	５０	６４	４７	３８

○県市町別埋蔵文化財担当者職員数の推移

（　）は嘱託数

	平成13年度	平成14年度	平成15年度	平成16年度	平成17年度	平成18年度
県	１６（　５）	１７（　５）	１８（　５）	２２（１３）	２２（１７）	２３（１７）
市町	４３（　５）	４７（１０）	４３（１２）	４２（１０）	４６（１０）	４６（１０）

Ⅱ　各遺跡の調査概要



遺跡名		所在地	遺跡名		所在地
①	稗田原遺跡	島原市	②	下宮遺跡	島原市
③	開遺跡	諫早市	④	小野条里遺跡	諫早市
⑤	黒丸遺跡	大村市	⑥	九州文化学園構内遺跡	佐世保市
⑦	門前遺跡	佐世保市	⑧	武辺C遺跡	佐世保市
⑨	竹辺D遺跡	佐世保市	⑨	竹辺D遺跡（試掘）	佐世保市
⑩	武辺城跡	佐世保市	⑪	末永遺跡	佐世保市

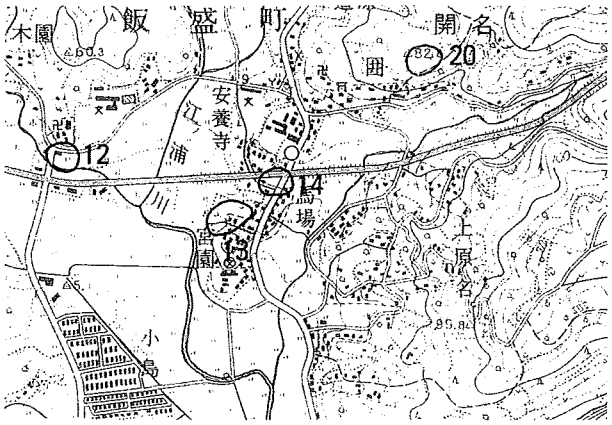
①稗田原遺跡（ひえだばる）

所 在 地	島原市稗田町	**調査主体**	長崎県教育委員会
調査原因	一般県道野田島原線道路改良工事	**調査面積**	372 ㎡
調査期間	平成 18 年 10 月 30 日～ 12 月 5 日	**調査区分**	本調査
報 告 書	平成 13 年 3 月刊行	**処　　置**	調査後工事

立　地

島原市は島原半島北東部に位置し，県内でも唯一の活火山である雲仙山系の活動によって形成された火山性扇状台地で構成されている。雲仙山系から派生した無数の小河川は扇状台地上を有明海に向かい放射状に流れ，小規模な沖積平野を造りだしている。

稗田町三会地区もこのようにして生まれた沖積平野である。南方には寛政 4 年（1792）に山体の大規模な崩落により甚大な被害をもたらした眉山がそびえ，西方には平成の大噴火で知られる普賢岳を望むことができる。



稗田原遺跡位置図（S=1/25,000）

稗田原遺跡は標高 20 ～ 30 mに立地しており，過去の発掘調査では古墳時代前期の住居址や古代の溝状遺構などが発見されている。周辺には中世の製鉄炉跡が検出された畑中遺跡や，古代の竪穴状遺構が確認された下宮遺跡などが隣接している。

調　査

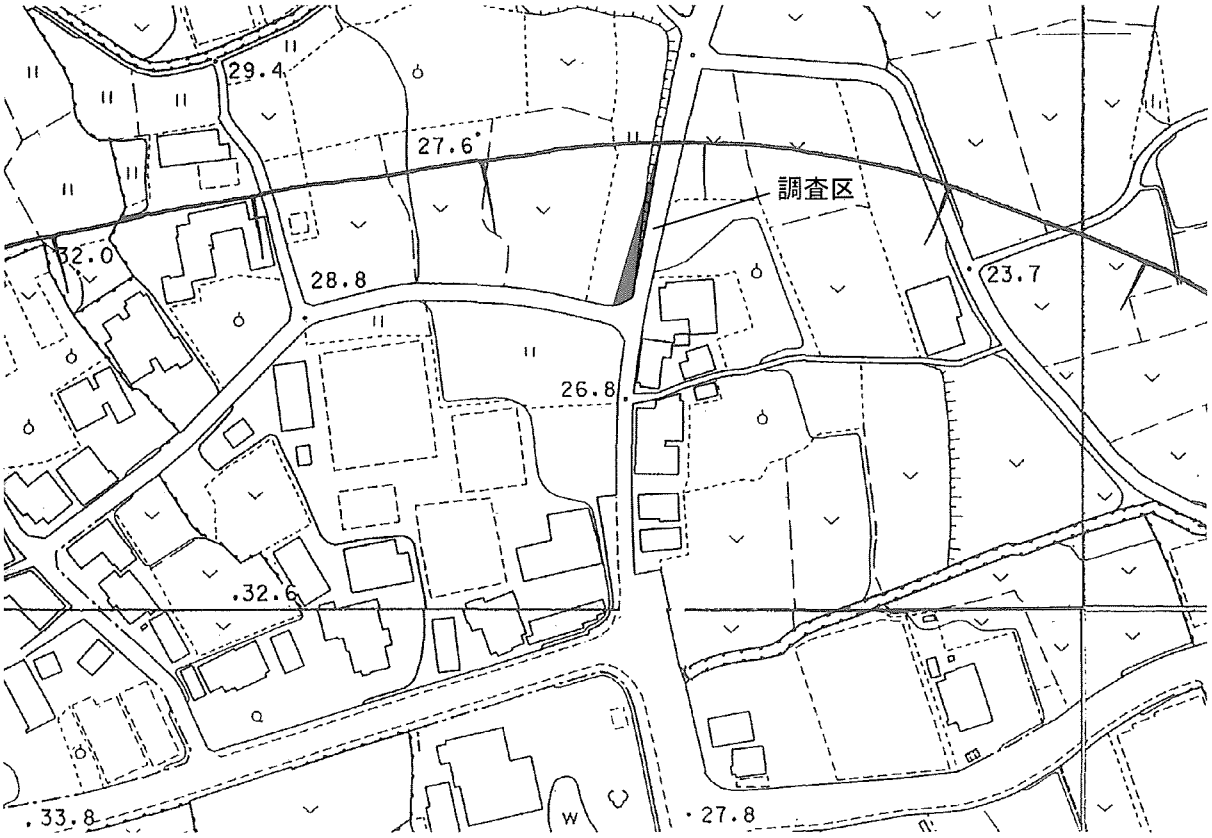
発掘調査は平成 16 年度に実施した県道拡幅工事に伴う範囲確認調査の成果に基づいて実施した。調査区は現道に沿い南北約 40 m，東西約 5 mに設定した。基本土層は次の通りである。

1 層は現代耕作土。2 層は床土。3 ・ 4 層は赤みをおびる黒褐色土で，近世の陶磁器を含む。5 ・ 6 層はややしまりの強い黒褐色土で，中世の包含層である。7 層以下は水成堆積層と考えられる黄白色砂礫の互層で，一部古代・中世の遺物を含む。遺構は 7 層を削り南北方向に流れる自然流路 2 状を検出した。流路内の覆土は 3 層からなり，高台付坏などの古代の遺物や，龍泉窯系青磁碗，東播磨系捏鉢など中世の遺物が出土した。その他の遺物として流路内から椀形滓が出土している。

まとめ

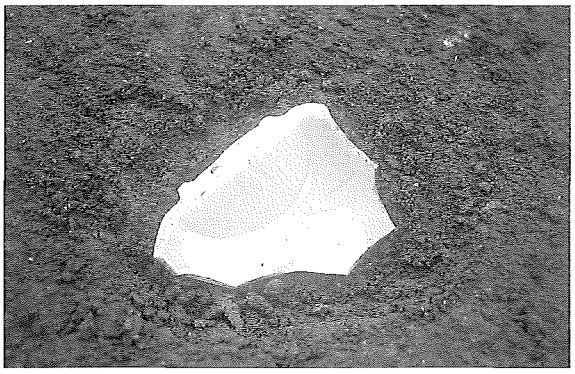
今回の調査では，中世の包含層と古代・中世段階に形成された自然流路を検出した。流路内から出土した椀形滓は一部欠損するものの平面方形と思われ，路底の形態を反映したものと考えられる。

調査区より東側は道路建設や宅地造成の際に大きく削平されているが，西側は比較的旧地形をとどめていることから，遺物包含層が残存している可能性が高い。【調査担当：中尾・平田】（文責：平田）



稗田原遺跡調査区位置図（S=1/2,000）

調査風景



自然流路内出土遺物①

自然流路内出土遺物②

自然流路内出土遺物③

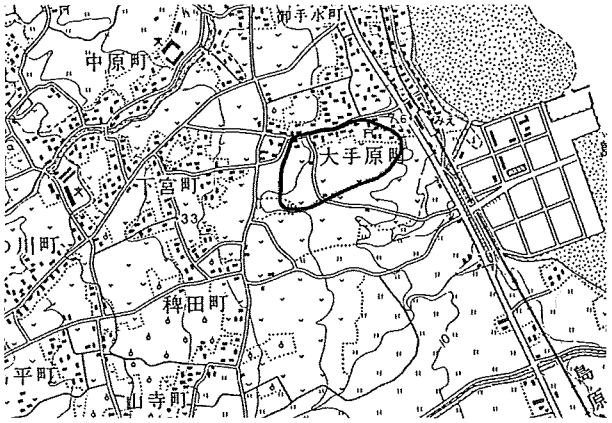
②下宮遺跡（しもみや）

所 在 地	島原市下宮町	**調査主体**	長崎県教育委員会
調査原因	一般県道野田島原線道路改良工事	**調査面積**	199 ㎡
調査期間	平成 18 年 9 月 4 日～9 月 27 日	**調査区分**	本調査
報 告 書	平成 18 年 3 月刊行	**処　　置**	調査後工事

立　地

島原市は島原半島北東部に位置し，県内でも唯一の活火山である雲仙山系の活動によって形成された火山性扇台地で構成されている。雲仙山系から派生した無数の小河川は扇状台地上を有明海に向かい放射状に流れ，小規模な沖積平野を造りだしている。

下宮地区もこのようにして生まれた沖積平野の一つで，南方には寛政 4 年（1792）に山体の大規模な崩落により甚大な被害をもたらした眉山がそびえ，西方には平成の大噴火で知られる普賢岳を望むことができる。下宮遺跡は標高 20～30 mに立地しており，昭和 56 年に県教委によって実施された分布調査で縄文晩期や弥生時代の遺物が表採されている。



下宮遺跡位置図（S=1/25,000）

その後は発掘調査の機会には恵まれず，本格的な調査が行われるのは今回が初めてである。

調　査

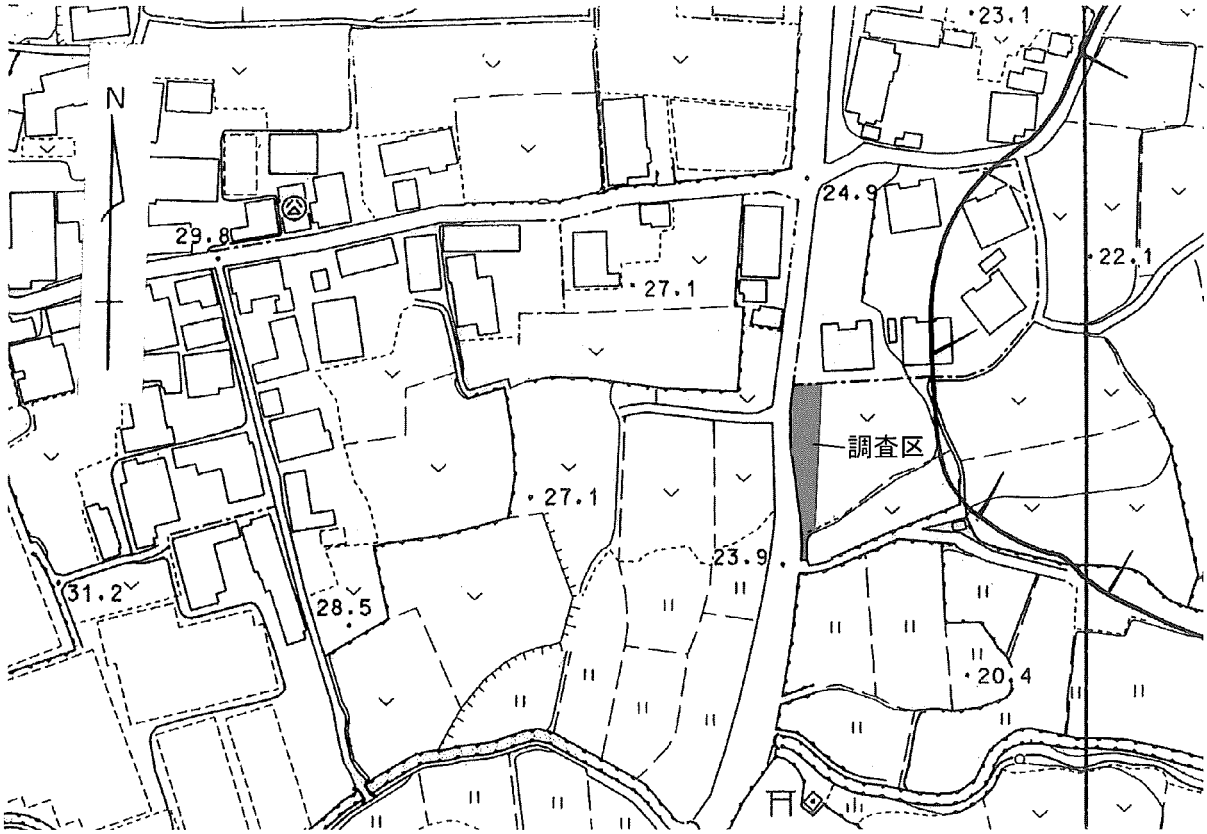
発掘調査は平成 17 年度に実施した県道拡幅工事に伴う範囲確認調査の成果に基づいて実施した。調査区は現道に沿い南北約 45 m，東西約 6 mに設定した。基本層序は以下の通りである。

1 層は表土。2 層は耕作土。3 層は褐灰土。4 層は黄褐色砂質土・にぶい赤褐色土。5 層は黒色土で下部には褐灰色砂が堆積する。4，5 層は古代・中世の遺物包含層である。6 層は黒褐色土で無遺物層。7 層は明褐色土で南半部でピット群を検出した層である。

遺構はピット 40 基・土坑 3 基・不明遺構 1 基・竪穴状遺構 3 基を検出した。

まとめ

今回の調査区の中央部西側が現代の撹乱により大きく削平をうけていた。検出した竪穴状遺構もこの撹乱により大半が削平をうけ形態など詳細は不明である。ただし，覆土からは古代の土師甕や須恵器が出土していることから古代の竪穴住居の可能性がある。ピット群は北部に検出した 3 基を除き，7 層で検出した。ピット内覆土からは弥生時代の甕の口縁部が出土するものもあり，当該期の柱穴群と考えられる。調査区の周辺には宅地が広がるものの，旧地形を残す箇所も多く見られることから付近には遺物包含層が広がっている可能性が高い。　【調査担当：中尾・平田】（文責：平田）

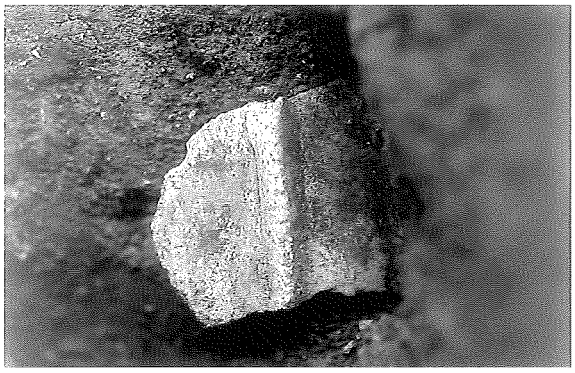


下宮遺跡調査区位置図（S=1/2,000）

調査風景

竪穴状遺構検出

ピット郡完掘



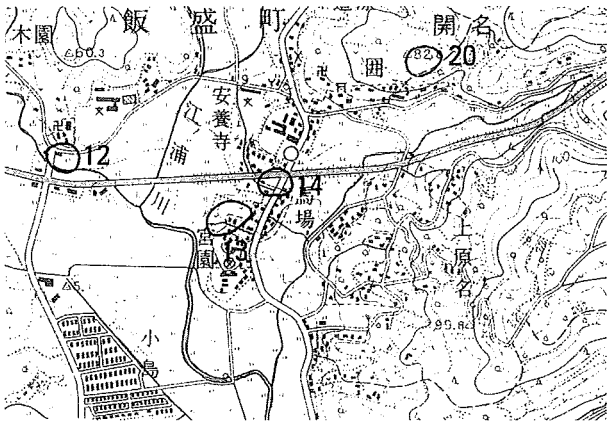
ピット内出遺物

③開遺跡（ひらき）

所 在 地	諫早市飯盛町開名	**調査主体**	長崎県教育委員会
調査原因	主要地方道諫早飯盛線道路改良工事	**調査面積**	180 ㎡
調査期間	平成 18 年 7 月 10 日～8 月 23 日	**調査区分**	本調査
報 告 書	平成 18 年 3 月刊行	**処　　置**	調査後工事

立　地

遺跡の所在する諫早市飯盛町は，長崎半島と島原半島を東西につなぐ諫早地峡の南部に位置し，単調な海岸線をなす橘湾に面している。遺跡の周辺は八天岳・飯盛山・佐田岳からなる飯盛溶岩円頂丘群が独立した火山体を形成し，これらの山体を解析して江ノ浦川が流れ，谷底平野を形成している。谷底平野は現在陸化しているが，中世までは「月の港」と呼ばれる海域であった。開遺跡は，谷底平野に向かって北から南へ突き出す，標高 17 m前後の河岸段丘状に立地するが，遺跡が営まれた当時は，周辺を浅海に囲まれた半島状の地形であったと推測される。



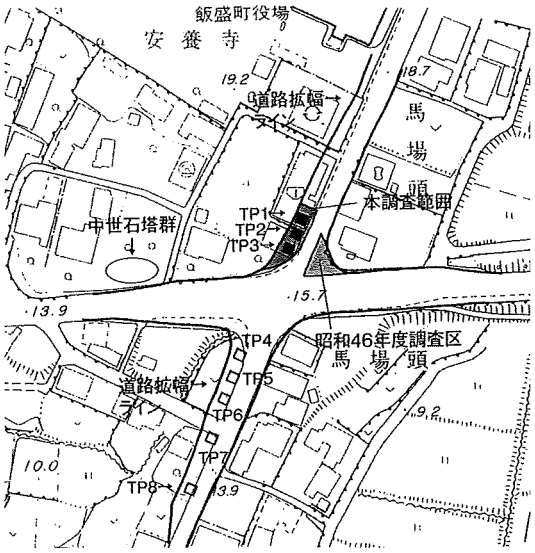
開遺跡位置図（S=1/25,000）

調　査

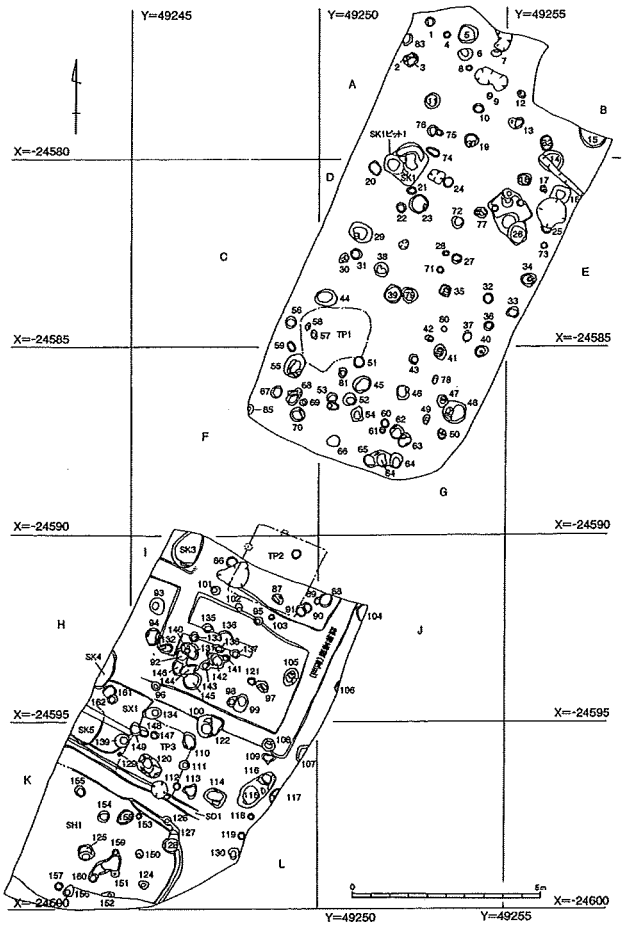
調査は，県道拡幅に伴って実施した。平成 16 年～17 年度の範囲確認調査の成果に基づき，現県道に沿って南北約 26 m，東西約 6 mの本調査区を設けた。基本層序は，近年の造成土でバラスやコンクリート片を含む 1 層，近代の水田耕作土および床土と考えられる 2 層，遺物包含層である 3 層（黒褐色粘質土），地山である 4 層（明黄色粘質土）となる。遺構はすべて 4 層を掘り込む形で構築されている。3 層の遺物包含層は，2 層の水田構築の際に遺構が撹乱されたことにより形成されたものと考えられる。

遺構は，弥生時代と 12～13 世紀にかけての遺構群を検出した。

弥生時代の遺構は，竪穴住居跡 1 基，掘立柱建物跡 2 基があり，調査区南端部と北端部に分散する形で検出した。竪穴住居跡は，南半部および西半部が調査区外となるものの，現状で東西 3.8 m，南北 3.4 mの隅丸方形と考えられる。主柱は現状で 6 基確認できるが，おそらく住居跡の掘り込み面に沿って配置する構造であったと考えられる。中央部に炉跡と見られる炭化物が集中する土



調査区位置図（S=1/3,000）



遺構配置図（S=1/200）

坑があり，隣接して3基の小ピットがめぐる。また，掘り込み面のきわに沿って床面に溝が半周している。遺物は，弥生時代中期末～後期初頭の甕形土器や丹塗りの壺形土器のほか，磨石1点が出土している。掘立柱建物跡は，いずれも4本柱で構成され，短軸長約1.5 m，長軸長約1.8～2.5 mである。倉庫等の可能性もあるが，規模が小さいことや，ピット内から大型の台石が出土したことから，竪穴住居跡が削平されてピットのみが残っていた可能性も考えられる。

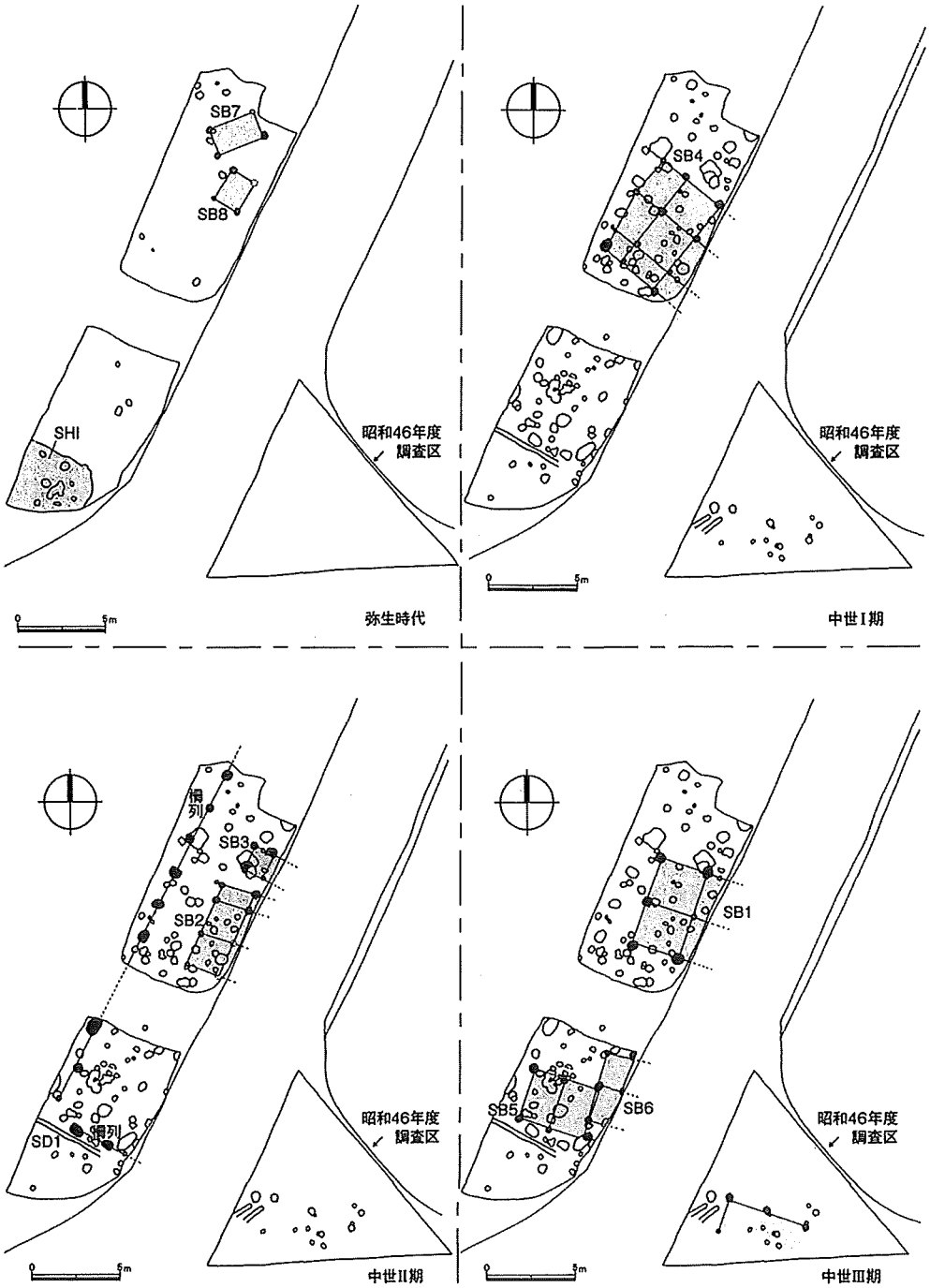
中世の遺構群は，調査区全面でピット群133基，土坑5基，溝状遺構1基，不明遺構1基を検出した。ピット群の配列の検討から，12世紀～13世紀にかけての6基の建物跡と2基の柵列の存在を確認した。これらの遺構群は，主軸の配列関係からおおむね3期に区分できる。時期別の変遷は，主軸は東から北側へ移しながら変遷していることや，建物自体も庇を持つものから持たないものへ，構造も1間×2間程度の蔵と考えられる建物が増える傾向にある。

遺物は，ピット内から，中国系の青磁碗・白磁碗を主体として，土師質土器や石鍋などが出土した。石鍋には器形復元可能な大型破片をはじめ，研磨や穿孔を施した再加工品も認められる。また，中世Ⅲ期の建物跡のピット内から，木柱の一部を検出し，ＡＭＳ年代測定の結果，暦年較正値でcalAD1295-1390の年代を得ている。

まとめ

今回は比較的狭い範囲であったにもかかわらず，12世紀～13世紀にかけての多数の遺構群を検出した。付近には，14世紀～15世紀の石塔群が残っているほか，遺跡の周辺には安養寺という天台宗寺院があったとの言い伝えも残されている。また，囲城をはじめ，中世城館が周囲に分布することから，今回検出した大規模な柵列を伴う建物遺構群も，周辺の中世遺構群との比較検討によりその性格が明らかになるであろう。

また，弥生時代中期末～後期初頭の竪穴住居跡や関連する建物跡群を検出したことは，本遺跡での活動が弥生時代まで遡ることを明らかにした点で重要である。周辺の弥生時代遺跡としては，海を望む湾口部に位置する下釜石棺群が古くから知られていたが，居住跡の発見は今回が初めてである。周辺には中世の遺構群のほか，弥生時代の遺構群も残っている可能性が高く，今後開発工事の際には十分留意する必要がある。



遺構郡の変遷（S=1/400）

竪穴住居跡

ＳＢＩ

柵列跡

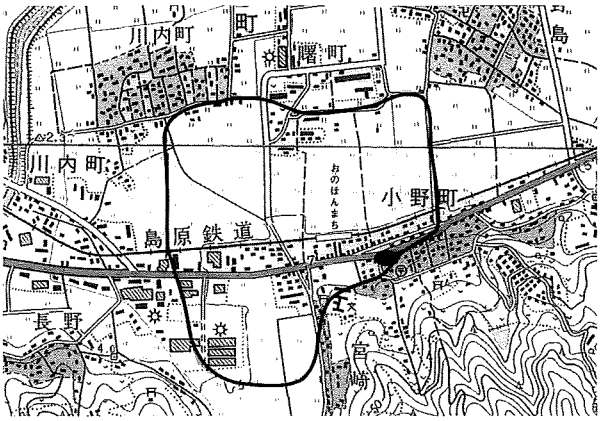
【調査担当：中尾・平田】（文責：中尾）

④小野条里遺跡（おのじょうり）

所 在 地	長崎県諫早市小野町・宗方町	**調査主体**	長崎県教育委員会
調査原因	一般国道 57 号森山拡幅事業	**調査面積**	3,740 ㎡
調査期間	平成 18 年 6 月 22 日～平成 18 年 12 月 27 日	**調査区分**	本調査
報 告 書	平成 19 年度刊行	**処　　置**	調査後慎重工事

立　地

諫早市小野地区（小野町・川内町・小野島町・宗方町・長野町）は，諫早市東部に拡がる諫早平野の南側に位置し，北は有明海（諫早湾）に面し，南は標高 247 m の金比羅岳から派生した丘陵部に接している。小野条里遺跡は，この小野地区中央の平野部に所在し，標高 3 ～ 5 m付近に立地する。遺跡の所在地は，現在大部分が水田として利用されているが，国道 57 号沿いや丘陵先端部の宅地・商店が密集している地域も含まれる。



小野条里遺跡位置図［諫早・諫早南部］（S=1/25,000）

この小野地区には，二ノ坪・三ノ坪・四ノ坪・五ノ坪・八ケ坪・大坪などの坪数詞名が残ることから，条里遺構の存在が想定されている（『諫早市史』1955〔昭和 30〕年・『多良山麓研究』1965〔昭和 40〕年）。1986～88（昭和 61～63）には諫早市教育委員会によって条里遺構の存否・限界及び成立年代の推定などを目的に範囲確認調査が実施された。その結果，畦畔や杭列などが検出され，条里制に係わる遺構であると推測された。このような見解や調査結果を受け，1994（平成 6 ）年には，『長崎県遺跡地図』（長崎県文化財調査報告書第 110 集）に小野条里遺跡として掲載され，古代（奈良時代）の遺跡として周知されることとなった。遺跡の面積は約 669,000 ㎡である。また，1994（平成 6 ）・1995（平成 7 ）年には，諫早市教育委員会による県営水田営農活性化排水対策特別事業に伴う調査が，小字「曽屋」・「扇町」において実施された。この調査において，弥生～古墳時代と思われる杭列や縄文晩期の遺物などが検出されており，条里制以前の水田耕作関連の遺構や遺物も確認されている。

遺跡上空写真（金毘羅岳）

隣接する遺跡としては，弥生時代や中世の杭列を検出した宗方筒井遺跡（小野宗方遺跡・小野堀口遺跡），旧石器～中世の遺物が確認された宮崎館遺跡，

中世の小野城跡などがある。これらの遺跡は，小野条里遺跡の後背地にあたる南側丘陵先端部とその西側平地に分布しており，小野条里遺跡の時期や性格を考察する上でも重要な遺跡群である。

調　査

調査は，国土交通省（長崎河川国道事務所）による一般国道57号森山拡幅事業に伴なうもので，平成17年度に実施した範囲確認調査の結果を受け実施したものである。遺跡に係る工事予定範囲は総延長約900 m，総面積約23,200 ㎡であるが，範囲確認調査の結果，縄文時代～中世の遺構・遺物が出土した3,740 ㎡について本調査を実施した。

遺構は，柱穴・土壙・甕棺・竪穴住居跡・集石遺構などを検出した。柱穴は全調査区で1,058基を検出しているが，半数以上は近世の柱穴である。中世の柱穴は，調査区の中でも比較的標高の高い（5～6 m）B・D・J区に集中している。土壙もほとんどは近世以降のものであるが，C区においてほぼ完形の土師皿4点を出土した中世の土壙を検出した。甕棺はD区において2基検出した。時期は弥生時代後期の小児甕棺であるが，2/3以上が欠損しており，残存状況はあまり好くない。E区において竪穴住居跡と思われる遺構を検出した。柱穴や焼土痕を確認しているが，南半は調査区外であり，北端は後世の削平を受けており，プランは定かではない。遺物は弥生中期の土器を検出した。集石遺構はE区・K区において1基ずつ検出した。E区の集石遺構は，平面プランが直径80 cmほどの円形で深さは20 cmほどである。遺物が出土しておらず，時期は不明。K区の集石遺構は平面プランが長方形で，長軸約2 m，短軸約1 mで深さは10 cmほどである。周辺から曽畑式，船元式，春日式などの土器が混在して出土している。

A・B区柱穴写真

C区土壙写真（土師皿出土状況）

調査区位置図（S=1/1,600）

以上のほかに，Ａ区北端において自然の落ち込み，Ｇ・Ｈ区において自然流路と思われる落ち込みを検出し，その覆土から大量の遺物を検出した。Ａ区の遺物は中世の土師質土器・白磁・青磁・滑石製石鍋などが主体であるが，縄文土器や石器・弥生土器なども認められ，中世期の流れ込みに混入したものと思われる。Ｇ・Ｈ区の遺物もＡ区と同様の出土状況であるが，下層には縄文晩期の土器溜りが残存していた。

また，Ｄ・Ｅ・Ｆ・Ｇ・Ｋ区には縄文期の遺物包含層が残存していた。曽畑式土器が主体であるが，Ｄ・Ｋ区からは押型文土器や縄文晩期の土器，Ｇ区からは坂の下式土器なども出土している。石器は石鏃・石匙・石斧などのほか，礫石器も多く出土している。

これら縄文期の遺物は特にＫ区に集中しており，石製装飾品（玦状耳飾り）２点もこの区からの出土である。

一方，矢板を打ち込んで調査を行ったＩ区においては，立杭２本，軽石製品１点，自然遺物（松ぼっくりなど）を検出した。杭は前年度の範囲確認調査（TP3）で検出した杭列とは方向が合わず，一連のものとは考えられない。立杭の年代を科学分析したところ，BC 800 ～ 760 年の値が出ている。また，Ⅱｂ層以下は海水の影響を受ける環境であったことが土壌分析の結果明らかになった。

まとめ

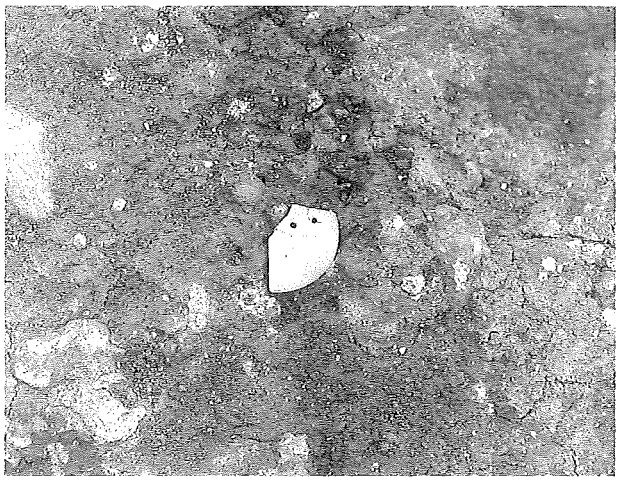
調査を実施した地点は，時期の異なる土石流が何度となく流れ下った痕跡が認められ，災害に見舞われながらも人々が連綿と生活をしていたことが判明した。

また，縄文～平安時代の遺物に関しては，土石流などによる流れ込みが多く，この時期の生活の跡は，土石流により流されてしまったか，もしくは調査区よりも南側の山麓付近にあったことが考えられる。中世～近世の時期には，調査地点に数棟の建物が建っていたことが明らかとなったが，性格等については不明である。

Ｉ区については，今回の調査でＩ区周辺の土層堆積状況の把握や自然科学的分析などを実施できたことにより，今後条里遺構を考察する上で重要なデータを得ることができたと考えている。

【調査担当：山下・竹中】（文責：山下）

Ａ区内黒椀出土状況写真



Ｋ区玦状耳飾り写真

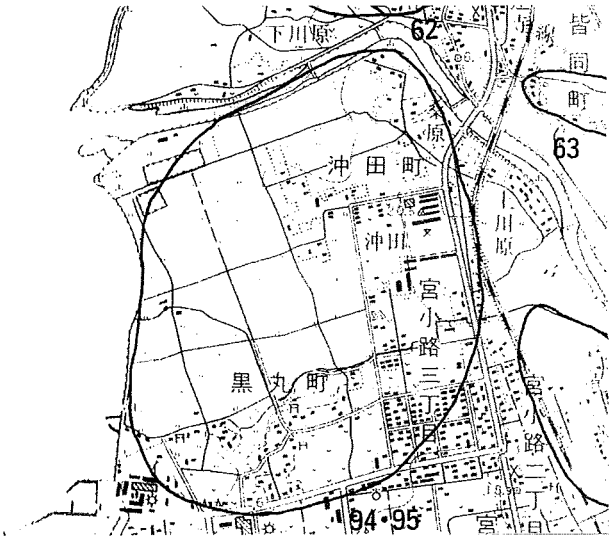
⑤黒丸（くろまる）遺跡

所 在 地	大村市宮小路３丁目	**調査主体**	長崎県教育委員会
調査原因	県職員住宅建設工事	**調査面積**	28 ㎡
調査期間	平成 18 年 5 月 29 日～6 月 2 日	**調査区分**	範囲確認調査
報 告 書	刊行予定無し	**処　　置**	慎重工事

立　地

黒丸遺跡は，郡川が形成した大村扇状地の末端に位置する。これまでの調査で，縄文時代晩期～弥生時代中期にかけてのドングリピットや甕棺墓・石棺墓などに伴って，多量の遺物が出土している。また，古墳時代の木製品等も多数出土している。

今回の調査は，周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲の中でも東寄りの地点で実施した。



黒丸遺跡位置図（S=1/25,000）

調　査

今回の調査は，県警本部の職員住宅建設に伴う範囲確認調査である。建物基礎部分に２ｍ×２ｍのトレンチを５箇所（Ａトレンチ～Ｅトレンチ）設定し，駐車場部分にも同規模のトレンチを２箇所（Ｆトレンチ～Ｇトレンチ）設定した。西半部のＡ～ＣトレンチおよびＦトレンチの一部は，近年の造成に伴う撹乱が著しく，客土が厚く堆積していた。一方，東半部のＤ～ＥトレンチとＧトレンチは比較的安定した土層の堆積を確認した。基本土層は次の通り。

Ⅰ層：近年の客土。厚さ 30～40cm

Ⅱ層：アスファルトおよびバラス層。昭和 50 年代まであった旧建設大学校のテストコースの道路の一部。厚さ約 30cm。

Ⅲ層：黄灰色粘質土。鉄分の沈着が認められ，旧水田の床土であろう。厚さ約 10cm。

Ⅳ層：灰黄褐色砂質土。厚さ約 30cm。

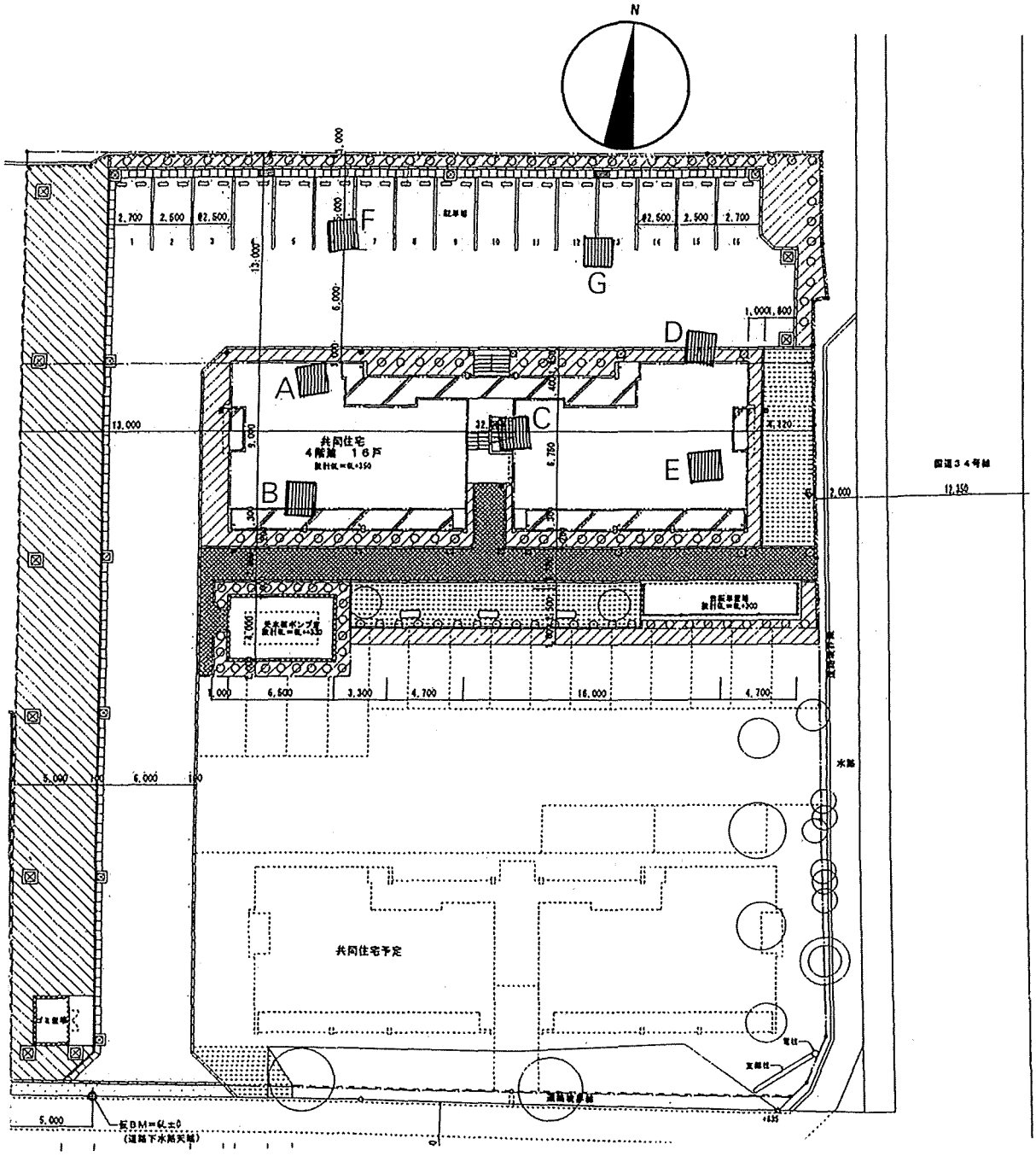
Ⅴ層：黄褐色砂質土。厚さ約 10～20cm

Ⅵ層：大村扇状地の基盤礫層

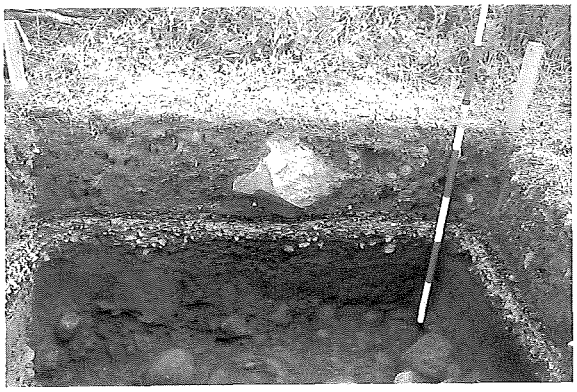
遺構は近世以降の新しいピットを数基確認したのみで，遺物も黒曜石製剥片３点および土師器片１点が出土したのみである。

まとめ

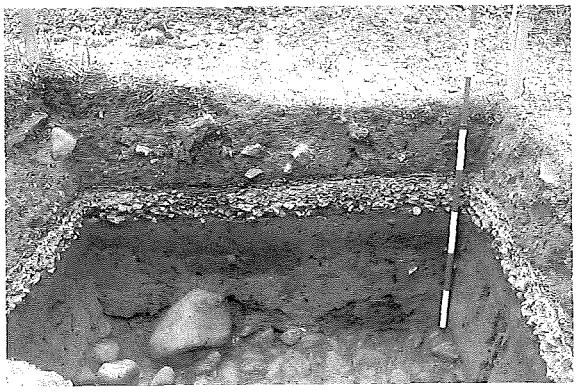
今回調査を実施した範囲では，遺構・遺物が残存している可能性は低い。したがって，工事に支障はないものと判断した。　【調査担当：中尾・竹中・平田】（文責：中尾）



黒丸遺跡調査区位置図（S=1/400）



E区土層



G区土層

⑥九州文化学園構内遺跡

所 在 地	佐世保市矢岳町	**調査主体**	長崎県教育委員会
調査原因	一般国道 497 号建設工事	**調査面積**	6,000 ㎡
調査期間	平成 18 年 5 月 22 日～平成 18 年 9 月 27 日	**調査区分**	本調査
報 告 書	平成 19 年度刊行予定	**処　　置**	調査後工事

立　地

当該遺跡は，佐世保市中心部西側にそびえる弓張岳から南東側に下る小丘陵に挟まれた谷部すその標高およそ 20 mに位置する。岩盤には佐世保石炭層があることから，この一帯は水圧により地滑りがおきやすい地形である。この地には 1887 年以降に集落が造成され，その後 1909 年に海軍練兵場として整地されている。

九州文化学園構内遺跡位置図［佐世保市北部］
(S=1/25,000)

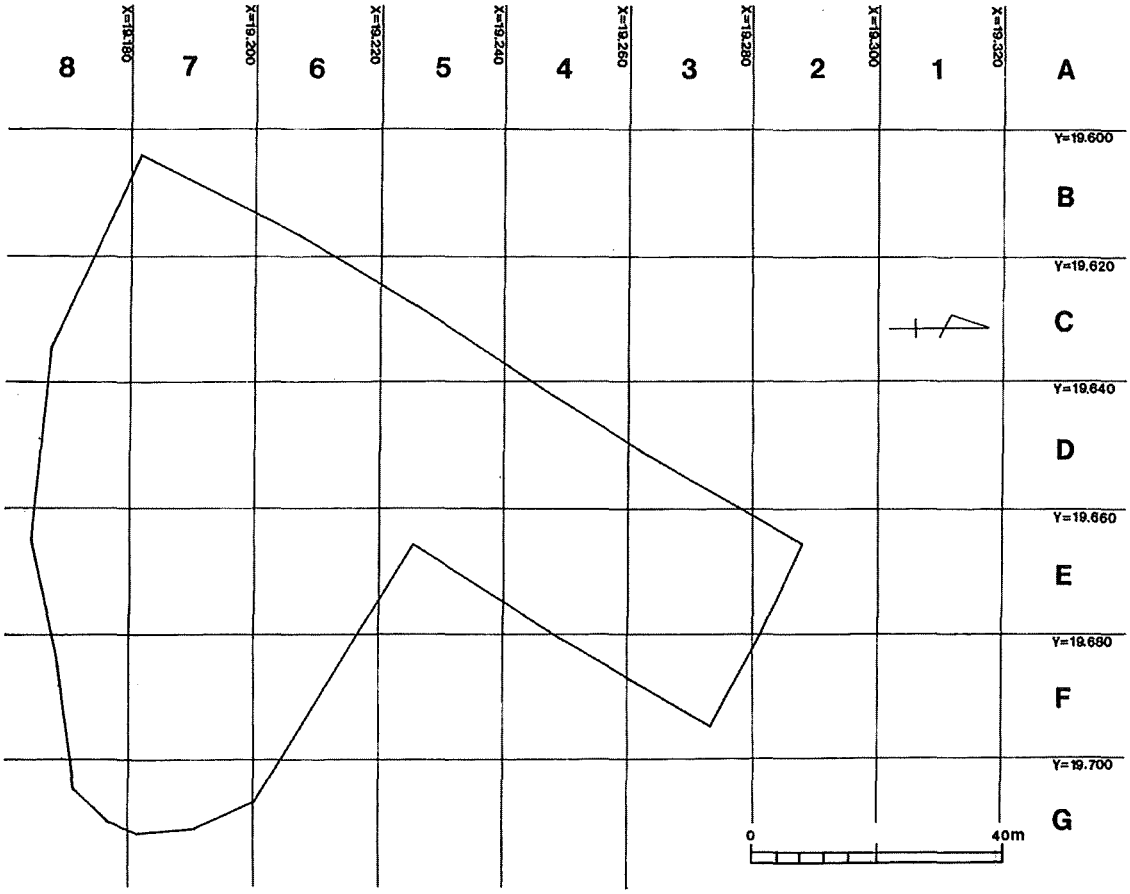
調　査

平成 18 年度の調査は，調査区を座標系に合わせて南北を主軸とする 20 m方眼のグリッドを設定し南北に 1～8，東西に A～G の番号を付した。まず，九州文化学園グラウンドの真砂を重機によって掘削した。範囲確認調査の結果を受けて縄文時代の包含層が残っていると思われる個所から人力により調査を実施し，現代の遺構である煉瓦礎石建物跡を検出した。その後，明治時代の集落の遺構・遺物が検出された。明治集落の遺構としては，礎石建物跡 4 棟，石垣 10 基，溝 18 条，木樋 1 基，埋甕 14 期，井戸 9 基を確認した。陶磁器，ガラス製品，木製品，金属製品，銭貨，瓦製品の遺物が出土した。記録に残っているペスト根絶のため 9 日間集落一帯を焼却したことを実証する厚さ 5 ～ 10 cm 程の赤い焼土の広がりを確認した。また，明確な遺構は確認されなかったが，縄文時代晩期の土器片，石鏃，石鋸，磨製石斧が出土した。

まとめ

平成 18 年度の調査は，明確な遺構が確認できなかったが縄文時代晩期の遺物包含層を確認できた。また，現代社会の基礎となる明治時代の集落遺構が確認できた。それらは，縄文時代の遺跡が多い北部地域との相互関係を明らかにする橋渡し的な立場になると思われる。

【調査担当：副島・町田・吉野・今里・深澤・柴田・半田・川鍋・秋山・杉本】（文責：杉本）



調査区およびグリッド配置図（S=1/1,200）

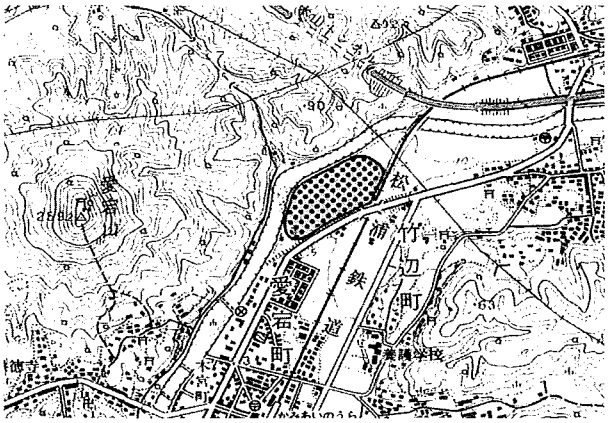
Ａ区集落全体（北から）

⑦門前遺跡（もんぜん）

所 在 地	佐世保市愛宕町・中里町	**調査主体**	長崎県教育委員会
調査原因	一般国道 497 号建設工事	**調査区分**	本調査
調査期間	（第 1 次）1,220 ㎡	**調査面積**	（第 1 次）1,220 ㎡
	（第 2 次）5,284 ㎡		（第 2 次）5,284 ㎡
報 告 書	平成 17 年度刊行，平成 19 年度刊行予定	**処　　置**	調査後工事

立　地

当該遺跡は，佐世保市北西部を流れる相浦川下流域の南岸部，標高約 8 mに立地している。佐賀県境にある八天岳分水嶺を水源として西に流れてきた相浦川は，ここで佐世保砂岩の露頭にぶつかり大きく南へ湾曲して河口に至る。近世以降の新田開発により河口までの距離は現在約 3.5 km である。近世以前においては浅瀬の湾が展開し，当該遺跡の近くに河口があって舟により容易に海に出ることができたと考えられる。相浦川を挟んで遺跡の西には円錐形の独立峰，標高約 259mの愛宕山（飯盛山）が位置する。この山は遠く五島沖からも確認される。前近代の航行においては，港津の成立条件としてランドマークが必要である。当該遺跡は，古くから海上交易の重要拠点であったと考えられるが，ランドマークとしての愛宕山の存在が，遺跡の成立と存続にとって最大の要因であったと推測される。また，飯盛山という古称は各地に存在するが，どの山も海上・陸上交通路沿いにあり，飯を盛った椀を神に捧げ，交通の安全を願う古代の神事に由来する名称であり，遺跡の性格上興味深い。



門前遺跡位置図［佐世保市北部］（S=1/25,000）

調　査

平成 18 年度の第 1 次調査は，遺跡の北部中央地区 1,220 ㎡について発掘調査を実施した。第 2 次調査は，遺跡の北西地区 5,284 ㎡について発掘調査を実施した。調査区は，座標系に合わせて南北を主軸とする 100 m方眼の大グリッドを設定し，東西をA～E，南北を 1 ～ 10 と符号し，さらに大グリッド内を 20 m方眼で区画して中グリッドを設定，1 ～ 25 の番号を付した。また，便宜上第 1 次調査の調査区は「く区」とした。第 2 次調査の調査区は，旧農道より北部地区を「け」区，旧農道地区を「こ」区，平成 13 年度調査区北隣地区を「さ」区とした。調査は，基本的には最上層の耕作土と次層の平成 5 年度圃場整備時の整地層を，地区によっては旧河道内堆積礫層も重機によって掘削した後に開始した。調査の結果，縄文時代晩期，弥生時代後期後半～古墳時代初頭，古代，中世，近世の遺構や旧河道，遺物などが検出・出土した。主な遺構・遺物は，以下の通りである。

（第 1 次調査）

・ピット群：C－8－17・18・22・23区の第 3 層上面，第 4 層上面で確認した。弥生時代後期後半～古墳時代初頭の土器を伴う。柱穴と考えられるが，建物としてのプランは判明しなかった。

・SR－11：C－8－18・22・23 区に位置する古代の河道。今回遺物は出土しなかったが，平成 17 年度の調査では，10 世紀の遺物が河床から出土した。現存する長さ約 23.2 m，最大幅約 1.9m，最深部約 0.8 m。幅は北岸部以外別の旧河道により切られているため不明である。

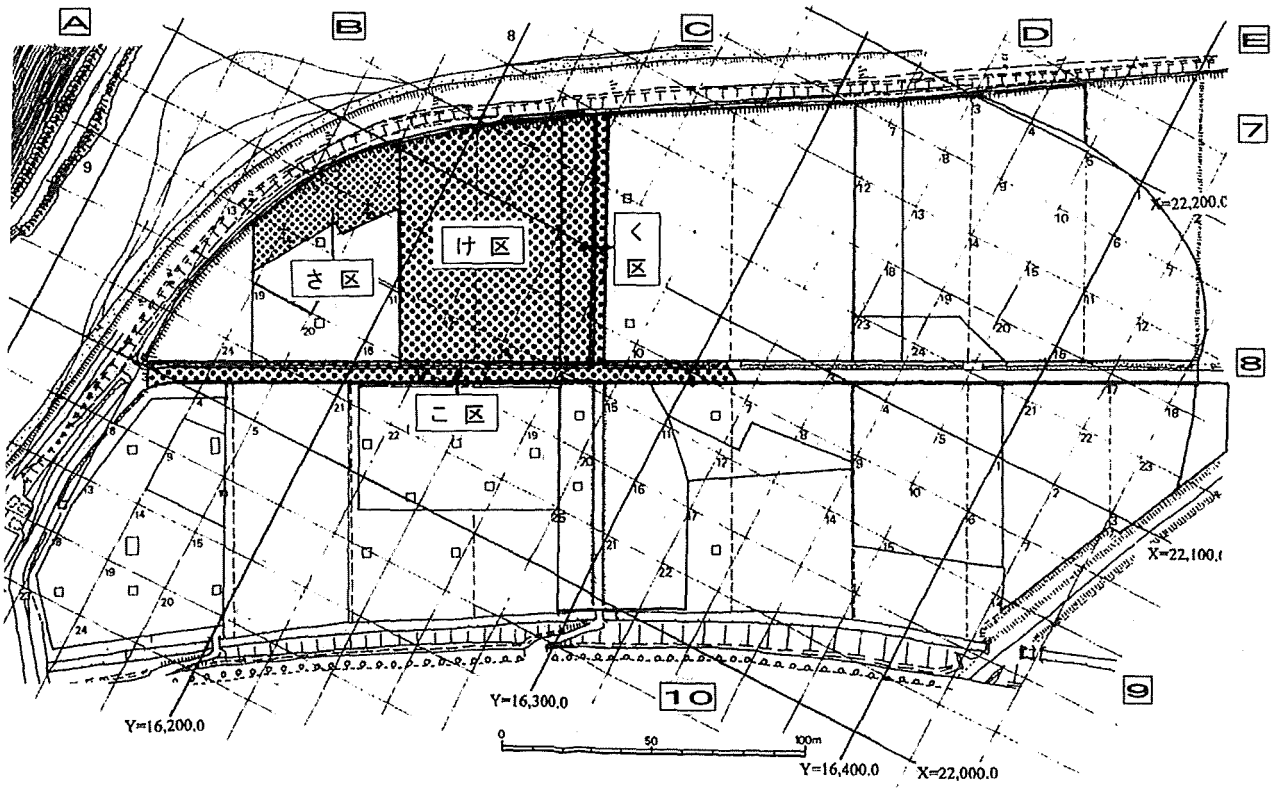
・SR－14：C－8－18・22・23 区に位置する。遺物は出土しなかったが，層位から縄文時代晩期以降古墳時代初頭までの間の河道である。現存する長さ約 2.5m，最深部約 0.4m。幅は大半を別の旧河道に切られているため不明である。

・SR－15：新河道と古河道に分けられる。 新河道は，C－8－17・18・22・23 区に位置する河道。埋土から縄文時代晩期の土器片が出土した。現存する長さ約 49.1 m，最深部約 0.8 m。幅は南岸部を別の旧河道により切られているため不明である。古河道は，C－8－18・22・23 区に位置する。遺物は確認できず。現存する長さ約 19.9 m，最大幅約 10.2 m，最深部約 0.5m。幅は南岸部を別の旧河道により切られているため不明。河床部からドングリ貯蔵穴が 5 基（DP－１～５）検出した。材や埋土内木の実などの放射性炭素年代測定の結果では縄文時代晩期のものである。

・DP－１：楕円形を呈し，長径約 117 cm，短径約 94 cm，最深部約 19 cm を測る。埋土下層より木の実が出土した。

・DP－２：不定形をなし，長径約 99 cm，短径約 94 cm，最深部約 35 cm を測る。内部から蓋に使用したと考えられる板材，埋土最下層より木の実が出土した。材の放射性炭素年代測定では，縄文時代晩期の数値が出ている。

・DP－３：DP－4 に切られ凡そ半分を失う。円形で，直径約 37 cm，最深部約 24 cm を測る。木の実は確認できず。材の放射性炭素年代測定では，縄文時代晩期の数値が出ている。



平成18年度門前遺跡調査区及びグリッド配置図（S=1/2,500）

・DP－４：ほぼ円形であり，長径約 114 cm，短径約 110 cm，最深部約 37 cm を測る。埋土下層より木の実が出土した。DP－3 を切る。

・DP－５：楕円形のピットであり，長径約 91cm，短径約 81cm，最深部約 38cm を測る。埋土上層に蓋と考えられる板材，最下層より木の実が出土した。その木の実の放射性炭素年代測定では，縄文時代晩期の数値が出ている。

（第２次調査）

・ピット群：C－8－21・22 区の第３層上面，第５層上面で確認した。第３層上面のものは弥生時代後期後半～古墳時代初頭の土器を伴う。柱穴と考えられるが，建物としてのプランは判明せず。第５層上面のものは伴う遺物なし。層位的に縄文晩期～弥生後期後半のもの。

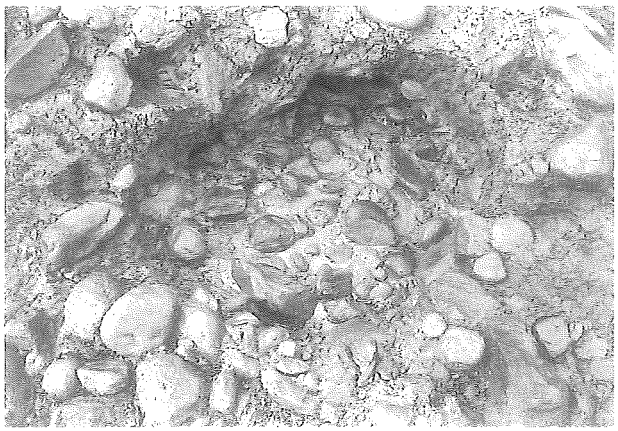
・SR－15：新河道は，C－8－22 区で確認。埋土から縄文時代晩期の土器片が出土。現存する長さ約7.85m，最深部約 0.89m。幅は南岸部を別の旧河道により切られているため不明。古河道は，C－8－22 区に位置。遺物は確認できず，第 1 次調査結果から縄文時代晩期の河道。現存する長さ約 16.60 m，最大幅約 2.50 m，最深部約 0.55 m。幅は南岸部を別の旧河道により切られているため不明。第 2 次調査では，ドングリ貯蔵穴は検出しなかった。

・SR－18：C－8－21・22 区に位置する。埋土層から弥生土器片・打製石鏃が出土した。現存する長さ約 10.00 m，最大幅約 5.40 m，最深部約 0.71 m。幅は北岸部のほとんどが調査区外のため不明である。東部・西部も別河道に切られる。

まとめ

縄文時代晩期のドングリ貯蔵穴は，過去の調査においても数基確認しているが，いずれも大部分を失ったものであった。今回のものは比較的残存状況が良く，相当量の堅果類が残っていたものもあり，この時代における生活環境の解明ため重要な発見であった。また，弥生時代後期後半～古墳時代初頭の柱穴と考えられるピット群は，平成 17 年度調査「か」区で検出したものが，さらに西側へ広がることを示した。過去の調査結果を含め，総合的に判断すると，遺跡の中央部が新しい河道によって大きく切られてはいるが，弥生時代後期後半～古墳時代初頭において，当該遺跡約 50,000 ㎡全域に墓域を含めた集落域が展開していたと考えられる。また，遺構等の様相から集落の中心部は当該遺跡より東南部，竹辺地区の微高地辺りと考えられるため，この地域に，長崎県本土部としてはかなり大規模な拠点集落が存在した可能性が高い。別調査による地域全体の様相解明が望まれる。

【調査担当：副島・町田・杉原・石橋・松尾・浦川】（文責：杉原）



DP－２完掘状況

DP－５完掘状況

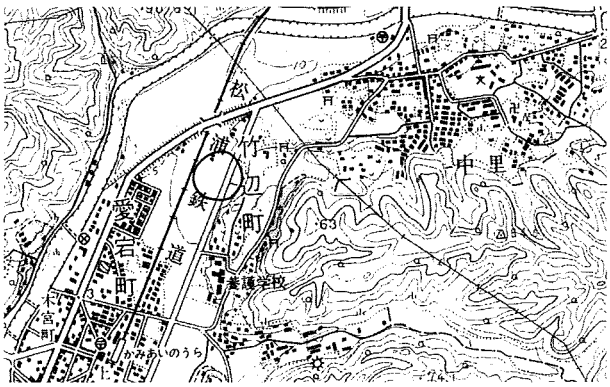
⑧竹辺（たけべ）Ｃ遺跡

所 在 地	佐世保市竹辺町	**調査主体**	長崎県教育委員会
調査原因	一般国道 497 号建設工事	**調査面積**	2,460 ㎡
調査期間	平成 18 年 5 月 29 日～平成 18 年 9 月 27 日	**調査区分**	本調査
報 告 書	平成 19 年度刊行予定	**処　　置**	調査後工事

立　地

本遺跡は，標高約 9 ～ 11 m の相浦川下流左岸の河岸段丘面に立地する。本遺跡の北側には小立川が流れる。将冠岳裾部には大小様々な溜池が点在し，小立川はそのうちの前原池・平山池を水源とする。

この川は愛宕山方面に東から西へ流れ，松浦鉄道および主要地方道佐世保・日野・松浦線下を潜り，地方道沿いを流れ，相浦川が湾曲する付近で合流する。



竹辺Ｃ遺跡位置図［佐世保北部］（S=1/25,000）

調　査

調査区は市道母ヶ浦・中里線を挟み，松浦鉄道を越え，主要地方道佐世保・日野・松浦線法面下まで調査箇所が点在する。そのため平成 17 年度調査に続き，調査区に番号を付し，便宜上 6 区・7 区・8 区・9－1区・9－2区・10－1区・10－2区・10－3区と称した。今年度の調査の結果，新しく検出した遺構は，掘立柱建物跡 3 棟・溝跡 18 条・土坑跡 1 基・自然河川跡 6 条・不明遺構 4 基・柱穴跡 423 基である。また，前年度と隣接する調査区では，検出した溝跡や土坑跡，周溝墓の続きを検出した。区ごとに調査の成果を述べていく。

6 区は近世水田跡および旧地形を形成する丘陵部を検出した。水田跡は南西側の扇形を呈する低地部に展開していたと考えられ，土壌の状況から湿潤な土地を形成していたと推察される。この低地部 5 層からは，白磁片や土師質土器片の遺物が出土した。また，5 層の旧丘陵部と考えられる 8 層を検出し，弥生時代後期～古墳時代初頭の土器及び旧石器時代のナイフ形石器や残核が出土した。

7 区では，前年度と同様に弥生時代・古代末～中世・近世と 3 時期にかけての遺構や遺物が，検出・出土した。検出した遺構は，掘立柱建物跡 2 棟，土坑跡 1 基，溝跡 13 条，柱穴跡群である。弥生時代は柱穴跡が数基確認した。古代末～中世初頭は，掘立柱建物跡・溝跡を確認した。掘立柱建物跡からの遺物の出土は限られる。しかし，ＳＢ1－Ｐ2から両黒黒色土器椀が出土した。掘立柱建物跡群の時期はこの土器と，調査区西側で集中していることから，10 世紀末～11 世紀初頭頃と考えられる。近世では掘立柱建物跡・土坑跡・溝跡を確認した。ＳＫ25 およびＳＫ34 において坩堝および小札が出土し，ＳＫ25 では絵唐津の片口鉢，ＳＫ34 では鉄絵陶器大皿や羽口など多くの陶磁器片・青花及び鋳造関連遺物が出土した。遺構の性格は廃棄土坑であるが，下層では水の影響が確認された。これらのことから，水を引き込む貯水の機能が想定される。出土した遺物から 17 世紀前半を示している。

以上から，掘立柱建物跡群とこれらの遺物を持つ階層の存在が竹辺周辺に展開していたと考えられる。

8区では，7区の現代水田の拡幅による造成を受けており，遺構の検出はなかった。しかし，造成土から弥生時代から近世にかけての遺物が確認された。

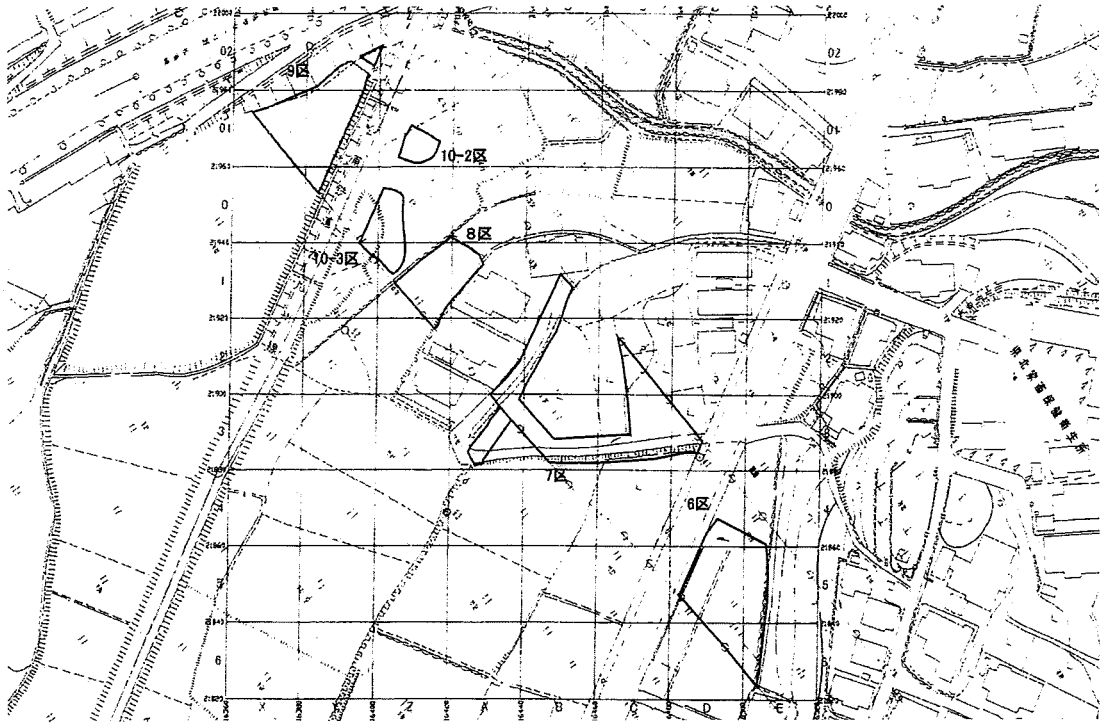
9－1区・9－2区では表土掘削後，砂岩が敷き詰めた層を掘削，赤褐色を呈する礫層を検出した。礫層除去後は全体に砂岩の岩盤が露出した。本調査区において遺構・遺物は出土していない。

10－2区・10－3区では，平成16年度調査でＳＲ－4が検出された調査区に隣接し，ＳＲ－4の流路内に位置する。10－3区は中央部にトレンチを設定後，層の確定を行った。その結果，7層に分層ができ，また，ＳＲ－4の堆積後に流れた河川跡を3条検出した。4ａ・4ｂ層では白磁片や土師器皿など中世の遺物が出土したが，4ｂ層を切るかたちで検出されたＳＲ－5からは染付片が出土し，時期は近世である。4ｃ層では畿内産瓦器を含む中世の遺物が出土し，4ｃ層を切るかたちでＳＲ－6を検出した。10－2区および10－3区は4層まではほぼ同様の層を形成するが，5層より様相が異なる。5ａ層は10－3区内で青灰色粘質土であるが，北東に向かうにつれて砂質を帯びる。10－2区内で5ａ層は粗粒砂混の円礫層に変わり，約1ｍの堆積の下には岩盤が露出した。5ａ層の遺物は弥生土器が大半を占め，数点の須恵器片が出土した。7層は人頭大の円礫を含む粗粒砂層で，堆積は薄く，遺物は少ない。9層の河床面では，縄文時代早期・前期・晩期の土器が弥生土器と混じり出土した。約20～40 cmの円礫堆積下，岩盤が露出した。

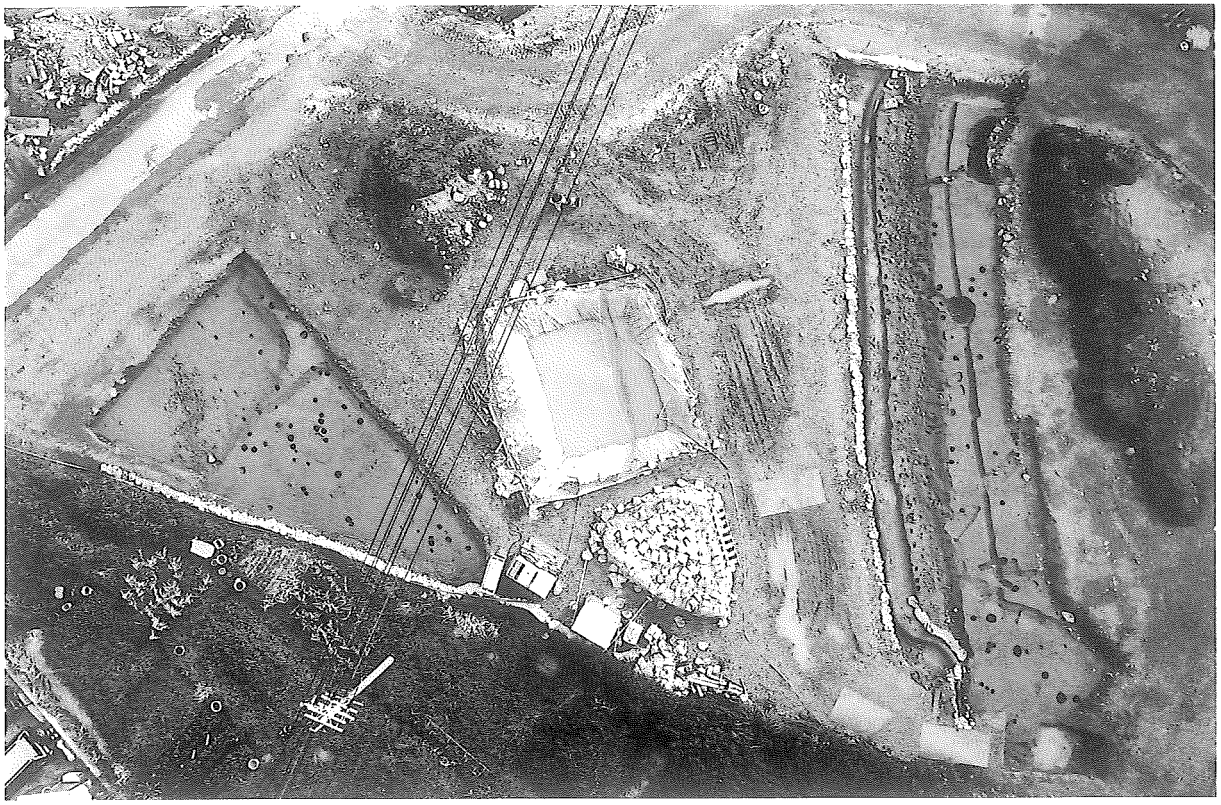
まとめ

今年度の竹辺Ｃ遺跡は平成16年度から継続した調査の最終年度にあたり，調査区範囲全て繋げることができた。成果として，6区で8層において弥生時代終末～古墳時代初頭の良好な遺物が，7区では古代末～中世初頭にかけての掘立柱建物跡，近世土坑跡から貯水施設と考えられる遺構を検出，10区ではＳＲ－4の9層において縄文時代早期・前期・晩期の土器を確認できたことである。6区8層は崖錘堆積物の風化した二次堆積物によって形成され，堆積状況からも人為的な攪拌を受けずに形成された層であると考えられる。隣接する竹辺Ｄ遺跡の河岸段丘上ではこの時期の遺構は確認されず，南西側の低地部は湿潤な土地柄，生活面としての利用は考えにくい。これらのことから，弥生時代終末～古墳時代初頭頃の生活空間は別にあったものと推察される。7区では3時期にわたり遺構の展開が確認された。柱穴跡からは縄文時代と考えられる残核数点が出土しており，本遺跡周辺における人々の痕跡が古くから行われていた可能性が考えられる。弥生時代では柱穴跡，古代末～中世初頭及び近世初頭は掘立柱建物跡の展開が確認された。古代末～中世初頭の遺構は，隣接する門前遺跡との関係が考えられ，今後当該周辺における歴史的事象と検討を加えていかなければならない。近世初頭の掘立柱建物跡は7区北西で検出し，当該地域の歴史および建築史，社会階層に関わる重要な手掛かりが得られた。今後，周辺の調査から資料の増加を待って，当該地区の歴史的事象を検討していかなければならない。10区のＳＲ－4は，門前遺跡ＳＲ－9とつながると想定をしていた。しかし10区と門前遺跡の間に位置する9区における調査で，遺構および遺物は確認されず，浅い段階で岩盤が露出した。このため門前遺跡で確認された河川跡と同河川跡であるとは判断がつかなかった。しかし周辺地形や河川跡から出土した遺物から，門前遺跡の河川跡とは同河川跡の可能性も考えられる。また出土した遺物から，縄文時代に門前遺跡とは別の集落がＳＲ－4上流部に展開していた可能性がある。

【調査担当：副島・町田・木村・江上・矢葺】（文責：江上）



竹辺Ｃ遺跡位置図［佐世保北部］（S=1/25,000）



７区調査区（真上から）

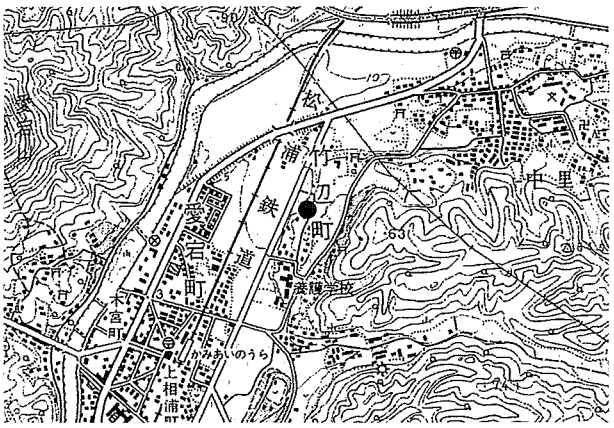
⑨竹辺（たけべ）Ｄ遺跡

所 在 地	佐世保市竹辺町	**調査主体**	長崎県教育委員会
調査原因	国道 497 号建設工事	**調査面積**	709 ㎡
調査期間	平成 18 年 8 月 8 日～平成 18 年 9 月 22 日	**調査区分**	本調査
報 告 書	平成 19 年度刊行予定	**処　　置**	調査後工事

立　地

遺跡は，相浦川左岸にあたり，相浦川の形成する河岸段丘上に位置する。佐世保市北部を流れる相浦川は，東の佐賀県境に接する八天岳分水嶺を水源として西に流れ，全長約 20 km，幅平均 4 kmの相浦谷を形成する。

遺跡の地形は，南北に延びる段丘崖の中段に位置し，かつては耕作地として利用されていたが現在では荒廃地となっている。調査区を南北に分けるように石垣が走り，標高は，東側が約 15 m西側は約 12 mを測る。



竹辺Ｄ遺跡位置図［佐世保北部］（S=1/25,000）

調　査

調査は，表土を重機掘削した後，国土座標に基づいて 20 mグリッドを設定した。このグリッドをさらに 10 mの小グリッドに分割し，人力によって遺構の検出と精査を実施した。なお遺構番号は前年度の調査を踏襲した。

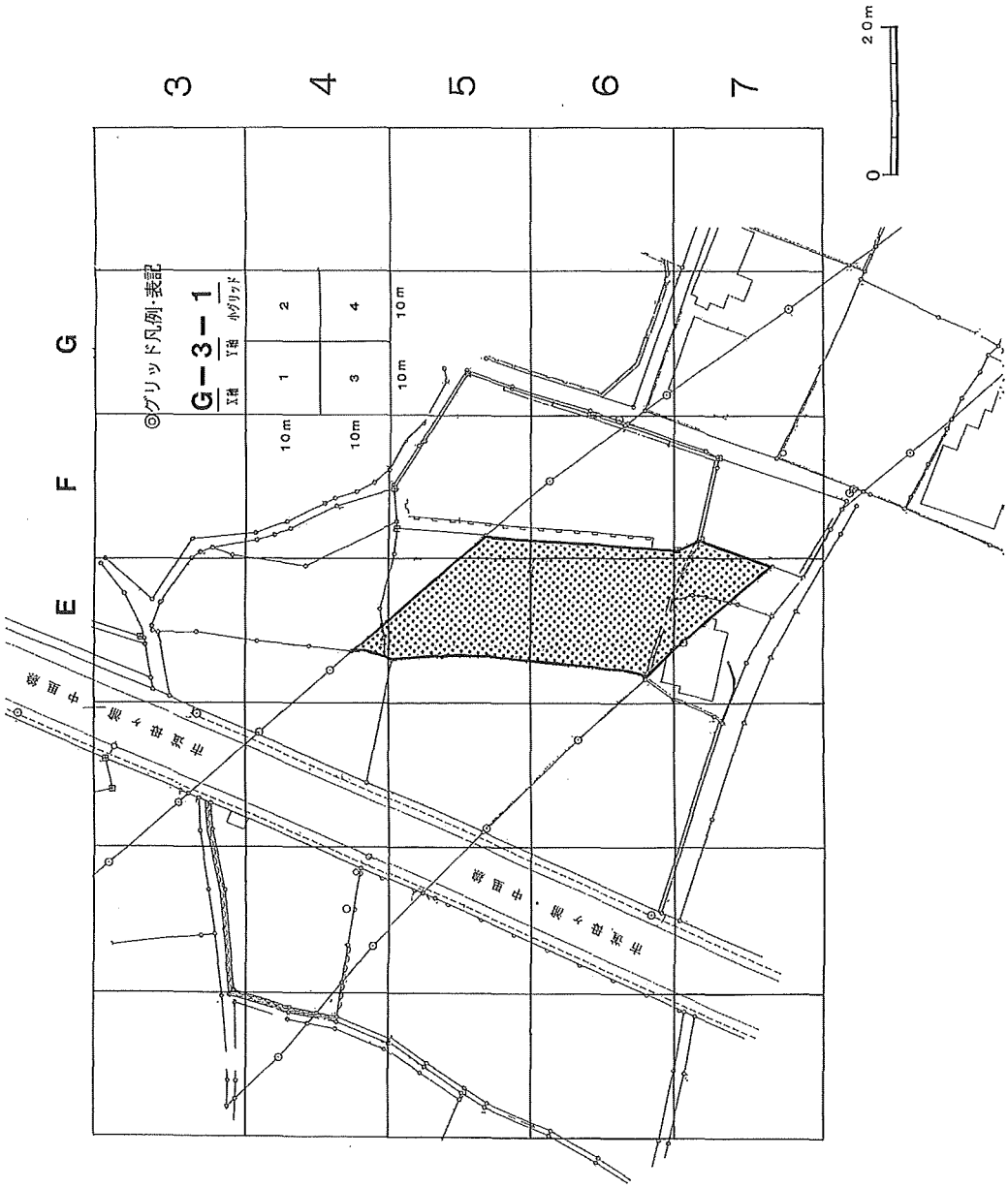
土層は，2 層に褐色土，3 層に黄褐色土の堆積があった。2 層からは近世陶磁器の出土があり，層上面から柱穴群を検出している。

検出した遺構は，柱穴 157 基，不明土坑 3 基を確認している。遺物は柱穴から寛永通宝・近世陶磁器片が出土している。また柱穴 3149 号からは糸切り底の土師器皿，柱穴 3137 号から土師器片が出土している。調査区の南側にあたる住宅敷地内（Ｅ・Ｆ－7 区とＥ－6 区）について最後に精査を実施したが，東から西に緩く傾斜する砂岩の岩盤にあたり遺構の検出はなかった。

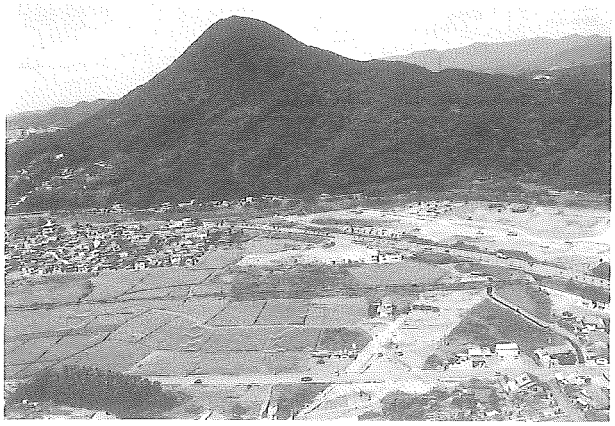
まとめ

竹辺Ｄ遺跡の当該調査区は，相浦川の形成する河岸段丘中段に位置し，中世から近世にかけて土地の利用があったものと推測された。しかし，近年の削平と斜面という自然条件によって，遺構・遺物の残存状況が悪く，竹辺Ｃ遺跡と接する西側部分に柱穴群を検出することができたものの，この部分より東側については砂岩の岩盤が露出しており，包含層の土自体が流失した状況があった。

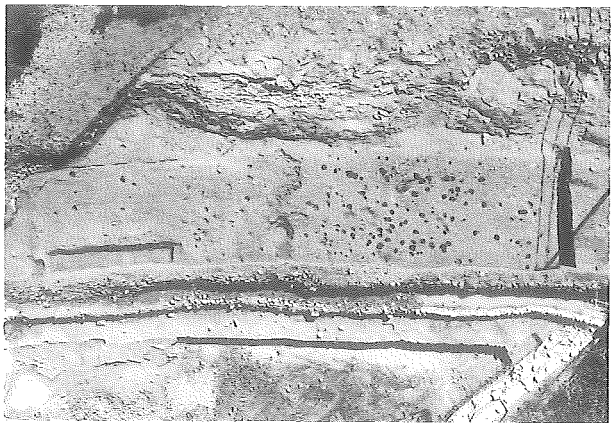
【調査担当：川向・川鍋・秋山】（文責：町田）



竹辺Ｄ遺跡調査区位置図［佐世保北部］（S=1/1,000）



竹辺Ｄ遺跡から竹辺Ｃ遺跡・門前遺跡・愛宕山遠影（南から北）



竹辺Ｄ遺跡柱穴郡検出状況

⑨竹辺（たけべ）Ｄ遺跡（試掘）

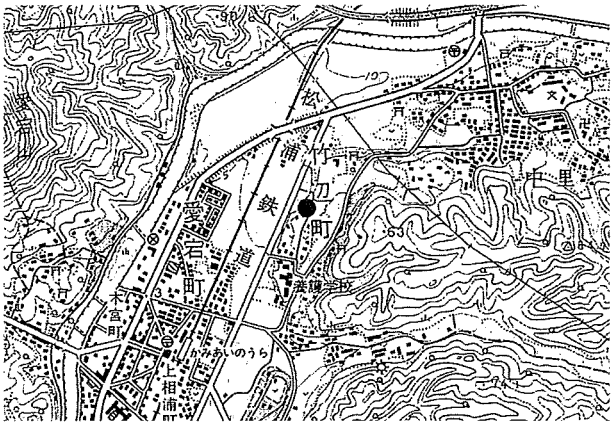
所 在 地	佐世保市竹辺町	**調査主体**	長崎県教育委員会
調査原因	学校建設	**調査面積**	8 ㎡
調査期間	平成 18 年 7 月 4 日～平成 18 年 7 月 6 日	**調査区分**	試掘調査
報 告 書	なし	**処　　置**	調査後工事

立　地

遺跡は，相浦川が形成した河岸段丘上に立地する。

遺跡地図では上位段丘面を竹辺Ｄ遺跡，下位段丘面は竹辺Ｃ遺跡として扱っている。武辺城跡のある古城山の裾部が西～南側へ緩やかな傾斜をみせるところに段丘は形成され，標高はおよそ 18 m から 11 m を測る。

当遺跡はこれまでの調査で，縄文時代～中世の遺物包含地であることが確認されている。なかでも中心をなすのは中世で，平安末期にこの地を開拓した武辺氏に由来する大宮姫神社や，14 代松浦定（1492 没）の墓所がある阿弥陀堂も付近には所在する。



竹辺Ｄ遺跡位置図［佐世保北部］（S=1/25,000）

今回の調査地点は竹辺Ｄ遺跡の南端、地形的には丘陵の尾根先端部にあたり，東側の浅い谷地形部分では水田が営まれ，西側の段丘斜面は佐世保養護学校の校舎となっている。

調　査

調査は，給食棟増築改修が予定されている正門脇の空地にて実施した。上下水道等の配管が地下に埋設されていることもあり，試掘坑の場所選定は県北振興局建築課の指示に従った。地表面はアスファルトで舗装されていたため，コンクリートカッターと重機を用いて 2 m 四方を除去委し、その後は人力で掘り下げた。掘削を行ったところアスファルトの下は砂利層で，その下は攪乱層もしくは地山層（灰色風化礫混黄褐色粘質土層）であることが判明した。地山面での遺構の有無を確認したが，遺物を含め，何ら成果を得ることはできなかった。地山面の凹凸が著しいのは，随所で掘り返しが行われたことを示しているのであろう。

まとめ

結果的に遺構・遺物は全く出土しなかったことから，当該地における工事着工には支障ないと判断した。ただし，工事中に遺構や遺物の不時発見があった場合は，早急に佐世保市教育委員会か県学芸文化課に連絡するよう調整した。

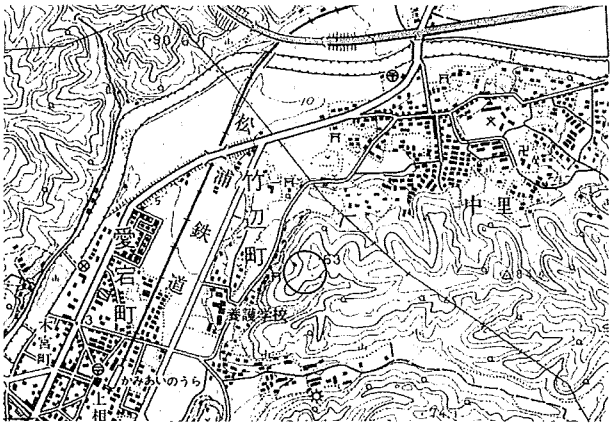
【調査担当：本田・和田】（文責：本田）

⑩武辺城跡（たけべじょう）

所 在 地	佐世保市竹辺町	**調査主体**	長崎県教育委員会
調査原因	一般国道 497 号建設工事	**調査面積**	321 ㎡
調査期間	平成 18 年 9 月 25 日～平成 18 年 10 月 27 日	**調査区分**	本調査
報 告 書	平成 19 年度刊行予定	**処　　置**	調査後工事

立　地

当該遺跡は，佐世保市北西部に位置し，将冠岳など標高 300 ～ 400 mの山々の先端部，標高およそ 60 mの丘陵に立地する。周辺地域には佐世保層群と呼称される砂岩層がひろがっている。平成 18 年度の調査区は，標高およそ 30 m を測り，調査前には宅地として利用されていた。遺跡の周辺には門前遺跡，竹辺 C・D 遺跡，四反田遺跡などが報告されている。



武辺城跡遺跡位置図［佐世保北部］（S=1/25,000）

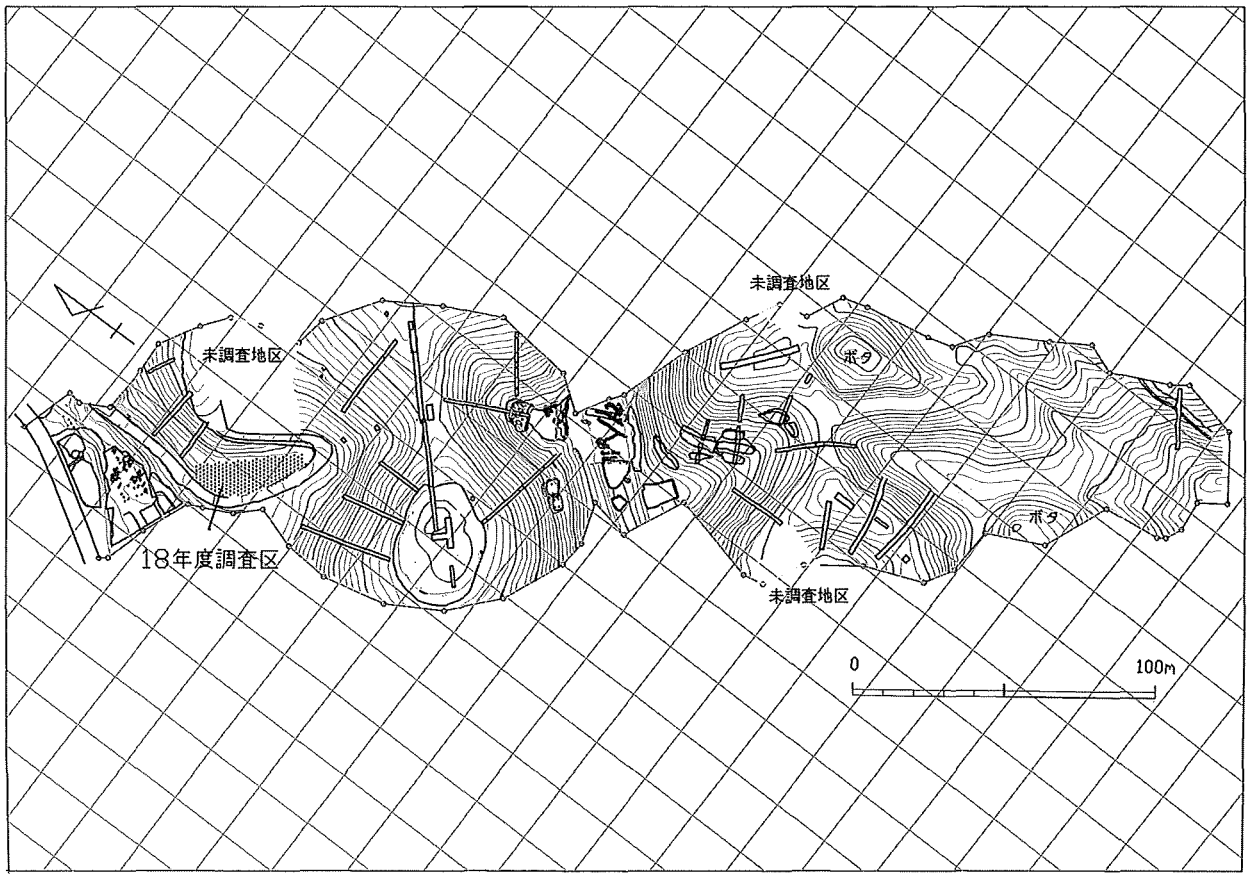
調　査

平成 18 年度の調査は，遺跡の北西部 321 ㎡について行った。調査区は谷にあたり，調査範囲の大半が急勾配の法面であった。平成 17 年度調査から継続し，調査区を国土座標軸に合わせ，南北を主軸とする 20 m方眼のグリッドを設定した。トレンチは調査区の北側斜面に伸びる尾根に直行するように設定した。調査は宅地造成時の盛り土を重機により掘削し，人力掘削に移行した。結果，比較的良好な堆積を示す調査区北東側は，尾根からの谷地形が確認され，近代に造成された段々畑に伴う石垣が一部検出された。また，堤が築かれており低床は調査区から外れるが，腐植土層が確認された。南西側は宅地造成により砂岩層まで大きく撹乱を受けている。遺物は流れこみと思われる石鍋片，龍泉窯系青磁片が確認されたが，遺物包含層や武辺城に関する遺構は確認されなかった。

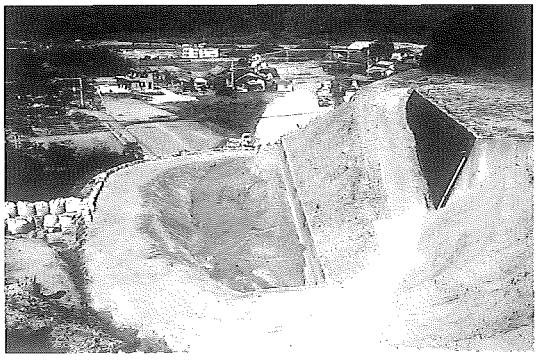
まとめ

18 年度調査区は，昭和初期には畑地として，1960 年代以降には林道や宅地造成が行われ，近・現代に繰り返し削平を受けている。武辺城と直接関係を示す遺構・遺物は確認されなかった。しかし，武辺城が機能していたと考えられている 16 世紀前後の遺物が周辺遺跡や，当遺跡の北側に陶磁器片が分布してみられる。武辺城の全容を知るうえにおいても，周辺地域の中・近世の環境や地勢などの解明が期待される。

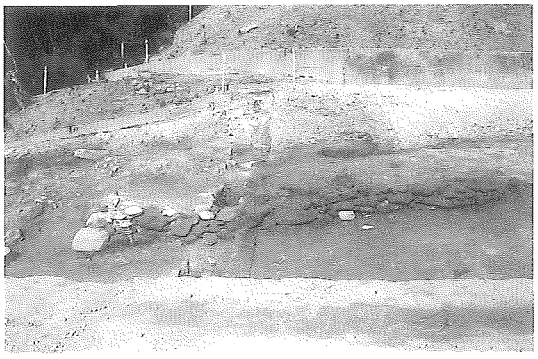
【調査担当：副島・町田・今里・柴田・秋山】（文責：柴田）



平成18年度調査区図［佐世保北部］（S=1/2,500）

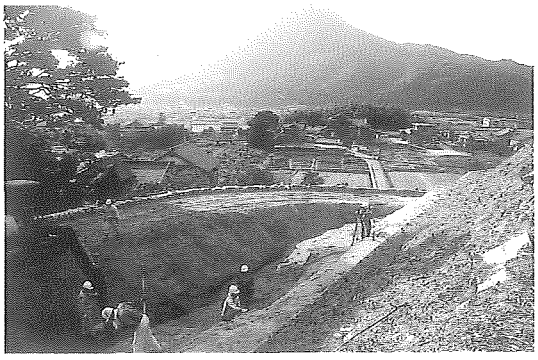


調査区遠景（東より）



石垣検出状況

土層（東盛）



調査風景

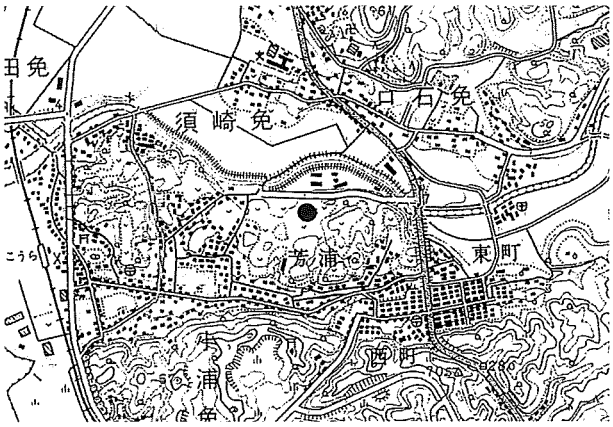
⑪末永遺跡（すえなが）

所 在 地	北松浦郡佐々町口石免字末永	調査主体	長崎県教育委員会
調査原因	西九州自動車道建設	調査面積	36 ㎡
調査期間	平成 18 年 9 月 13 日～9 月 21 日（6 日）	調査区分	確認調査
報 告 書	平成 19 年年度刊行	処　　置	調査後工事

立　地

遺跡の所在する佐々町は，長崎県第二の都市佐世保市と南側で接し，東を佐世保市と合併した吉井町，西を同じく佐世保市に合併した小佐々町に接し北側を江迎町・鹿町町で接している。

遺跡は，木場川南岸の斜面に拡がる第 3 紀層（堆積岩類の砂岩）上の標高約 2 ～ 20 m の緩やかな傾斜地に所在する。南側は，畑地として現在利用されている。



末永遺跡位置図［佐世保北部］（S=1/25,000）

調　査

調査区は，平成 17年度の地区名称及び試掘坑の番号を踏襲し，3 区に区分した東区・西区・宮ノ前区の内の西区に TP19～TP27 を設定し，9 ヶ所の試掘坑について確認調査を実施した。

層序は試掘坑 TP25～TP27 が表土層直下に砂岩の岩盤を確認した。TP19～TP22 は，耕作土下に 2 層の明黄褐色粘質土が堆積していたが遺物・遺構を確認できなかった。また TP23・24 にいても同様 2 層の堆積は認められたが，遺構・遺物に関しては確認できなかった。

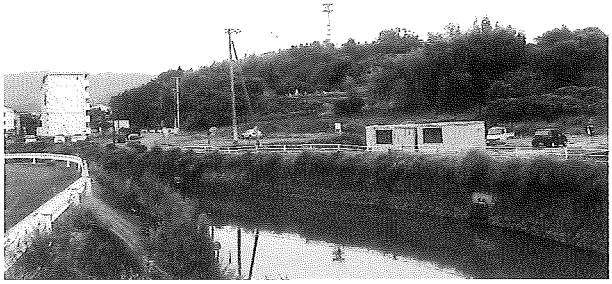
今回の調査では，いずれの調査坑からも遺構の検出はできず，遺物についても耕作土から近世陶磁器片等を 22 点採集したに留まる。

まとめ

以上の調査から遺構・遺物を包含する層が残存する可能性はほぼ無いものと考えられる。このことから，平成 17 年度及び 18 年度の範囲確認調査結果から末永遺跡での工事計画地区については，工事に支障ないものと判断された。

調査地点の位置と環境は，北側に木場川及び西側に宮ノ川と呼ばれる湧水地があり生活の環境としては良好な場所と考えられる。遺跡の範囲としては，工事区域外の南側の丘陵部畑地に広がりがあるものと予想される。

【調査担当：町田・松尾】（文責：町田）



末永遺跡遠景（西から）

報告書抄録

ふりがな	ながさきけんまいぞうぶんかざいちょうさねんぽう
書名	長崎県埋蔵文化財調査年報 15
副書名	平成 18 年度調査分
巻次	
シリーズ名	長崎県文化財調査報告書
シリーズ番号	第 196 集
編集者名	長崎県教育庁学芸文化課
編集機関	長崎県教育委員会
所在地	〒850-8570 長崎市江戸町 2-13　TEL095-894-3383
発行年月日	西暦 2008 年 3 月 31 日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査機関	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
黒丸(くろまる)遺跡ほか 12 遺跡								

長崎県文化財調査報告書　第196集

長崎県埋蔵文化財調査年報15

〔平成18年度調査分〕

平成20年3月31日

発　行　長崎県教育委員会

長崎市江戸町2-13

印　刷　昭英印刷有限会社